

2011
No.27

九州共立大学工学会誌

目次

工学部の歩み	1
機械工学科・メカエレクトロニクス学科の歩み	7
メカエレクトロニクス学科研究室の紹介	11
国際会議（ISLCT2010）に参加して	15
電気工学科・電気電子情報工学科・情報学科の歩み	18
第2学舎の記憶	24
土木工学科・都市システム工学科・環境土木工学科の歩み	26
環境土木工学科研究室の紹介	30
建築学科の歩み	37
足跡をさがして～peep a little～	41
環境サイエンス学科の歩み	44
環境化学科と生命物質化学科の歩み	52
「工学部お別れ会」の報告	54
平成22年度工学会講演会について	58
「工学部お別れ会」を終えて	59
工学会運営委員を経験して	60

今回の取材のためにご協力くださいました方々に心から感謝申し上げます。
工学会運営委員会一同

工学部の歩み

工学部長 小島 治幸

1. 工学部の設立と黎明期

工学部は、昭和42年4月に設立された。その設立趣旨は、福原学園60周年記念誌によると「昭和40年代に入り、日本経済が急成長していく中、技術系大学への進学希望者が増加。加えて、発展著しい北九州市工業界からの年来の要請に応え、高度な工業技術に長じた技術者を育成するため、昭和41年9月に工学部（機械工学科・電気工学科・土木工学科・建築学科、入学定員各学科60名）の設置認可を申請した」と記されている。昭和41年11月には、新校舎の工学部本館（第2学舎、鉄筋4階建）が竣工し、昭和42年3月に設置の認可を得て、同年4月に「工学部」が開設された。表-1に工学部に関連した出来事と歴代工学部長を示す。

設置した4学科は、日本経済の高度成長に伴い、あらゆる産業の母体となる機械技術者や電気技術者、社会基盤等の整備に求められる土木技術者、商用ビル・マンション・個人住宅等の需要拡大に求められる建築技術者の人材需要に応えるものである。

工学部は実験・実習を重視するため、工学部本館には電気関係（一部建築関係を含む）の実験室が整備された。併せて、学部開設年の8月に、機械関係と建築関係の実験・実習機器等を備えた第3学舎（鉄骨平屋建て）、機械関係、建築関係及び土木関係の実験・実習機器を備えた第4学舎（鉄骨平屋建て）が竣工した。工学部の学年進行に伴う学生の収容および施設・設備の充実を図るため、工学部の完成前年度となる昭和44年の8月には、鉄筋四階建ての第5学舎が竣工した。1階には機械、土木、建築の各学科の実験室、2階には物理化学実験室、機械工学科の実験室、研究室、3・4階には製図室、講義室、研究室を設けた。

さらに、昭和45年4月に第6学舎（木造平屋建て）、昭和48年5月に第7学舎（木造平屋建て）が竣工し、土木関係の実験室が集約された。両学舎は、昭和63年7月、土木実験棟（鉄骨平屋建て）に改築され、平成2年3月に増築（鉄骨2階建て）された。昭和49年度より入学定員が各学科80名に増員されることになり、その対処のため、昭和48年7月、鉄筋4階建ての第8学舎が竣工した。1階から3階が講義室、建築製図室、研究室、4階が大講義室、建築学科の実験室からなり、建築関係がこの第8学舎にまとめられた。

2. 環境化学科と開発学科の増設

日本の高度経済成長に伴い、重工業都市として発展してきた北九州市は、職業病の予防、労働者の健康管理等、産業医学の教育のため、昭和53年4月に産業医科大学の開校を予定していた。本学園は、産業医科大学が近隣に設置されるのに合わせて薬学の教育研究体制を計画した。昭和50年7月に「薬学部本館」（鉄筋陸屋根8階建て）の新築工事に着工し、昭和51年9月に竣工した。薬学部設置のための施設・設備が整備された後、昭和52年7月に薬学部設置認可申請を行った。しかし、「政令都市抑制」の時限立法により、薬学部の設置を断念することとなった。

薬学部新設を成し得なかった本学は、高度経済成長によって工業界が目覚しく発展していた反面、深刻な公害問題が起こるといった社会的背景を受けて、昭和53年6月、工学部に環境化学科（入学定員40名）と開発学科（入学定員40名）の設置を申請し、12月25日の認可を経て、翌54年4月に環境化学科と開発学科を増設した。環境化学科は、環境問題を生物学・化学的分野から探求し、地球の生態系にとって快適な自然環境を創造することを目的とした。一方、開発学科は、工業的な見地から環境問題に取り組み、地球の環境を保全し、良好な環境を創造しながら国土を開発していくことを目的とした。

表-1 工学部に関連する主要な出来事と歴代の工学部長

年代	主要な出来事	工学部長
S. 42年4月	• 工学部機械工学科・電気工学科・土木工学科・建築学科の4学科開設(入学定員各学科60名)	末光俊介教授(機械工学科)
S. 44年8月	• 第5学舎が竣工	
S. 48年7月	• 第8学舎が竣工	
S. 49年4月	• 入学定員が各学科80名に増員	
S. 51年4月	• 西第1学舎が竣工	岡崎一三教授(教養教室)
S. 54年4月	• 工学部に開発学科・環境化学科の2学科を増設	
S. 55年4月		上滝具貞教授(機械工学科)
S. 61年4月		諫早幸男教授(土木工学科)
H. 2年4月		長弘雄次教授(土木工学科)
H. 4年4月	• 大学院工学研究科修士課程の設置申請の準備開始	三石信雄教授(機械工学科)
H. 5年4月		粟谷陽一教授(開発学科)
H. 6年4月		田代勇司教授(環境化学科)
H. 7年6月	• 大学院の設置申請を延期	
H. 9年12月	• 深耕館が竣工(7月)	嶺勝敏教授(電気工学科)
H. 11年4月		鳥野清教授(土木工学科)
H. 13年4月	• 大学院工学研究科修士課程を設置、鳥野清教授、工学研究科長に就任 • 電気工学科を電気電子情報工学科に、開発学科を地域環境システム工学科に名称を変更 • 九州共立大学総合研究所設置・藤井邦夫教授、所長に就任	
H. 15年4月	• 大学院工学研究科後期博士課程を設置 • 能智紀台教授、総合研究所長就任	黒田正治教授(地域環境システム工学科)
H. 17年4月	• 機械工学科、電子電気情報工学科を募集停止 • 対外開放学科、情報学科を開設 • 土木工学科を都市システム工学科に、地域環境システム工学科を環境システム工学科に、環境化学科を生命物質化学科に名称を変更 • 前田良刀教授工学研究科長	宇野美津夫教授(機械工学科)
H. 19年4月	• 都市システム工学科を環境土木工学科に名称を変更 • 環境システム工学科、生命物質学科を募集停止 • 生地也也教授、工学研究科長に就任 • 宮人嘉夫教授、総合研究所長に就任	小島治幸教授(都市システム工学科)
H. 20年4月	• 対外開放学科、情報学科、環境土木工学科、建築学科を募集停止	
H. 21年4月	• 工学研究科博士後期課程 機械電子システム工学専攻、環境・都市システム工学専攻を募集停止 • 尾道建二教授、総合研究所長に就任	
H. 22年4月	• 工学研究科博士前期課程 機械生産システム工学専攻、電子情報工学専攻、都市システム工学専攻、環境システム工学専攻を募集停止	

3. 九州共立大学大学院の設置計画

工学部は、昭和42年の開設以来、教育研究体制の充実を図り、ますます高度化する工業技術に対応する大学院の設置の準備が整ったと判断した。今後の高等教育において学部・大学院一貫教育により、広い視野に立ち総合的な判断ができる優秀な人材を育成するため、機械系を柱とする機械システム工学専攻(入学定員5名)、電気系を中心とする電子情報システム工学専攻(入学定員5名)および土木系を中心とする建設システム工学専攻(入学定員5名)の三専攻からなる大学院工学研究科修士課程の設置申請について、平成4年6月に文部省と事前協議を行った。その中で、文部省から一年延期を打診されるなど、かなり厳しい状況にあることから、設置申請を延期することにした。さらに、平成7年6月に文部省から3項目の行政指導を受けたことにより、大学院の設置申請を再度延期せざるを得なくなった。

平成11年度の補助金復帰を果たした理事会は、新規事業の解禁を受け、到来する私学の冬の時代へ向けて既に進めておかなければならない教育改革が大きく立ち遅れているため、その遅れを早期に取り戻すこ

とが当面の最重要課題であるとして、平成12年から九州共立大学では大学院工学研究科の設置を最優先課題として教育改革を推進していった。

4. 九州共立大学大学院工学研究科の開設

たびたび設置申請の延期を余儀なくされた大学院工学研究科修士課程の設置について、学園創設者の宿願でもあったこと、本学がハイテク産業都市を目指す北九州市に位置していること、同市内に工学研究科を持つ大学が一枚のみであること、国際化に対応して留学生の大学院進学を可能にすること等を工学研究科の設置理由として、平成12年7月に設置認可を申請した。9月末の实地調査を経て、12月21日付けで設置認可を得て、大学院工学研究科は平成13年4月に開設された。

工学研究科修士課程は、工学部を基礎として表-2に示す4専攻からなる。

表-2 大学院工学研究科修士課程の概要

専攻名	講座編成
機械生産システム工学専攻 (入学定員6名)	材料加工、エネルギー変換、生産システムおよびシステム基礎工学の講座により編成する。
電子情報工学専攻 (入学定員6名)	電子物性、計測・制御システム、電気システムおよび情報処理システムの講座により編成する。
都市システム工学専攻 (入学定員7名)	構造システム工学、建設材料工学、地盤・基礎工学・水圏・環境工学および空間システム学の講座により編成する。
環境システム学専攻 (入学定員6名)	地域環境工学、開発環境工学、機能物質化学および環境生物化学の講座により編成する。

工学研究科修士課程を修了後、引き続き博士課程へ進学できるように、平成14年6月、工学研究科博士後期課程の設置を協議し、12月19日付けで設置の承認を得て、平成15年度から博士後期課程を開設した。これに併せて修士課程を博士前期課程に改めた。博士後期課程は、以下の2専攻からなる。

(1) 機械・電子システム工学専攻(入学定員2名)

本専攻は、博士前期課程の機械生産システム工学専攻と電子情報工学専攻を融合し、物性機能システム領域、生産加工システム領域およびエネルギーシステム領域の3領域により編成する。

(2) 環境・都市システム工学専攻(入学定員2名)

本専攻は、博士前期課程の都市システム工学専攻と環境システム学専攻を融合し、建設創造システム領域、空間創造システム領域及び環境システム領域の3領域により編成する。

5. 工学部電気工学科と開発学科の名称変更

工学部の電気工学科と開発学科の名称に関して、受験生にとって現在の学科名では教育内容が分かりにくい等の問題があるため、平成13年度から電気工学科を電気電子情報工学科に、開発学科を地域環境システム工学科に名称変更した。

6. 三大学(九州共立大学、九州女子大学、九州女子短期大学)の統合構想

補助金の完全復活を受けて、理事会は、学園の運営体制の整備や教育研究環境の改善が求められることから、平成12年2月に新たに「キャンパス将来構想検討委員会」を設置した。同検討委員会は、大学の経営建て直しなくして学園財政の再生はあり得ないとの観点から、平成12年5月から大学統合に関する検討を重ね、7月に「5年後の大学統合を目標とする」との検討結果を理事長に報告した。8月に大学統合専門委員会が設置され、さらに詳しい検討が進み、平成13年5月、大学の改組と統合に関する大学改革推進委

員会を設置した。平成14年9月には、学園財政の改革のために、平成17年度の三大学統合を前提として学園改革に取り組むことを理事会で決定し、大学統合に向けて踏み出した。その推進母体となった学園改革推進会議は、下部組織の大学統合部会において三大学統合改革案を検討し、平成15年12月に「福原学園三大学統合・改組の基本方針」を策定し、理事会に提示した。基本方針の概要は、以下のとおりである(名称は仮称)。

- (1) 平成17年度に統合と改組を行う。
- (2) 学部は、経済学部(経済学科)、マネジメント学部(マネジメント学科)、スポーツ科学部(スポーツ科学科、スポーツ健康学科)、環境工学部(情報デジタル工学科、福祉・ロボット工学科、デジタルデザイン学科、環境設計工学科、自然利用工学科)、食薬学部(薬学科、栄養学科)、文化学部(国際文化学科、文化創造学科)、人間科学部(人間生活学科、人間発達科学科)、短期大学部(こども学科)の8学部で構成する。
- (3) 設置経費56億円は、自己資金、2号基本金及び遊休不動産等処分収入を充てる。

この基本方針に対して、設置経費の資金調達に不動産売却収入を充てることの不確実性があること、完成年度でも食薬学部以外の学部が赤字であり、黒字化の改善を要すること、収支算定の基礎となる数値の信頼性が危惧されること、完成年度でも依然として人件費比率が高いこと、九女短大の1学科を在存させることの精査が必要であること等の指摘及び要望が出され、審議の結果、これらの事項を慎重に勘案して統合改組の準備を進めることが承認された。

その後、教学・経営の視点等からの検討を重ね、「九州共立大学と九州女子大学の統合・改組・新学部設置および九州女子短期大学の改組の大綱」案が、平成16年8月に理事会で審議され、最終案は以下のとおりである。

- (1) 新大学の学部学科の構成は、経済学部(経済学科、総合マネジメント学科)、工学部(メカエレクトロニクス学科、情報メディア学科、都市システム工学科、建築学科、環境サイエンス学科)、人間科学部(人間科学科、栄養学科、生活環境学科)、文化学部(現代コミュニケーション学科、文化学科)、スポーツ健康科学部(スポーツ科学科、健康支援科学科)、薬学部(薬学科)。短大は、養護保育学科。
- (2) 設置経費は、47億円。財源には、自己資金のほか、2号基本金を充てる。

この大綱案に対し、薬学部の設置に関して6年制教育への移行や運営経費の問題があること、財政的負担に関する問題があること、同窓会の同意を得られる見通しがはっきりしていないこと、現状の赤字改善がなされていないままで新学部設置には不安があること、これらの諸問題が決着してから再度審議すべきであり、平成17年度という時期は表記すべきではない等のさまざまな意見が出され、審議の結果、これらの意見を議案承認の付帯条件とすることで大綱が承認された。

その後、大綱の承認にあたって付された付帯条件が解決されていないこと、近年のうちに薬剤師の供給が需要を上回るという外部環境の悪化や6年制移行に要する資金の手当ができていないことにより、薬学部の平成17年度設置は困難と判断し、見送る方針を内部決定した。三大学の統合・既存学部の改組・新学部の設置を三点セットとした大綱の平成17年度実施が困難な状況となっていく中、改善の策の検討・協議も行われるようになった。そして、11月、未だに同窓会の同意を得ることができないために、理事会として、平成17年度の大学統合および薬学部設置が困難であることを承認するに至った。これにより、平成12年度から膨大な時間と労力を傾注した三大学統合改組の計画は、頓挫した。

7. 工学部の学科改組および学科の名称変更

7.1 機械工学科と電気電子情報工学科の改組

三大学統合の中止により大幅な学部各科の構成や内容の変更による教育改革が進められなくなるとの危機感を持った工学部は、今後急激に進む少子化による18歳人口の減少や若年層の理工系離れの増加に対して、早急な教育改革が必要であると強く意識した。このため、三大学統合案で作り上げた学科改組等の改革を推進すべきとの意見でまとまった。この教育改革の基本的な考え方は、「従来、工学分野はそれぞれが独立した専門領域からなる学科構成としていたが、21世紀における技術社会では融合型テクノロジーへの変貌が加速しており、複数の領域に精通した技術者が要望されている」ことである。これに応えるため、機械工学科の学生募集を停止し、電気電子情報工学科の電気電子分野を融合させた「メカエレクトロニクス学科(入学定員65名)」を届出設置することとした。また、情報社会においても、コンピュータの超LSI化やデジタル技術の進歩に伴い、あらゆる分野に情報技術が活用されていることから、ハード主体の電気電子情報学科を募集停止し、文系的要素を取り入れた「情報学科(入学定員65名)」を届出設置することとした。そして、平成16年7月に両学科の設置を届出、10月5日の受理を経て、平成17年4月に両学科を設置した。メカエレクトロニクス学科は、エコエネルギーコース、ロボティクスコース、エアロスペースコースの3コース制で構成される。情報学科は、情報メディアコースとコンピュータ応用コースの2コース制で構成される。

7.2 土木工学科、地域環境システム工学科および環境化学科の名称変更

土木工学科は、都市の整備および再開発事業が盛んになり、都市の機能を守り、維持するためのシステムの構築が要望されているため、平成17年度から「都市システム工学科(入学定員65名)」に名称を変更。次いで、平成19年度には、環境分野の教育プログラムが整備されたことから、「環境土木工学科」に名称を変更した。

地域環境システム工学科は、その名称では学科の内容が分かりにくいと、平成17年度から「環境サイエンス学科(入学定員60名)」に名称変更した。

環境化学科は、近年、食品を含む物質の安全性や機能性に社会の関心が高まってきたことから、食品関連の教育内容を充実させるため、平成17年度より「生命物質化学科(入学定員60名)」に名称変更した。

8. 九共大工学部の学生募集停止とその後

工学部は、平成17年度に2学科改組および3学科の名称変更を行ったが、6学科すべて定員割れに直面した。スポーツ学部の設置認可に際しては、「工学部メカエレクトロニクス学科、情報学科、都市システム工学科、環境サイエンス学科、生命物質化学科の入学定員比の平均が0.7倍未満となっていることから、今後の定員充足のあり方について検討すること」との留意事項が付された。この留意事項に対し、工学部改革に有効な施策を速やかに講じる必要があるとして、平成17年12月21日開催された福岡学園大学改革検討委員会にて、その委員会のもとに九州共立大学工学部改革検討小委員会(委員長:大学改革プランナー奥田俊博助教授)の設置が承認され、工学部改革について検討を重ねた。その結果、名称変更を行っても入学者の減少が止まらず、今後の見通しも立たない環境サイエンス学科と生命物質化学科の2学科については、平成19年度から募集を停止することを平成18年7月に決定し、8月に届出した。

2学科の募集停止直前に、残る4学科を前提とした工学部組織改革と工学部の教育体制を充実させるための方策を検討するために工学部ビジョン委員会が平成18年6月30日に設置された。この委員会は、精力的に作業を進め、短期間で改革案をまとめ上げた。その案を基にして、その当時の学長であられた佐古学長から学長提案として、1学部1学科の環境工学部環境工学科(仮称)が平成18年12月に大学改革検討委員会に提示された。しかし、工学部の将来方針については、九共大の大学基準協会加盟申請保留の際の指

摘事項、スポーツ学部設置認可時の留意事項および平成22年度までに大学認証評価を受けなければならないこと等の重要課題を解決するために、安易な改革は許されないことから、大学改革検討委員会および経営戦略会議での慎重な検討を行い、平成19年3月、経営戦略会議の協議を踏まえ、学長提案として出された1学部1学科案は財政改善に実効ある改革案ではないとの判断から、常務理事会は工学部を平成20年度から募集停止する方針を固めた。

その後も工学部から工学部存続案が提案され、理事会と学長をはじめとする工学部の代表者との協議がなされたが、財政改善に実効ある改革案ではないとの判断、および少子化による18歳人口の減少や学生の工学部離れの加速という社会的環境を踏まえ、平成19年5月に工学部を平成20年度から募集停止することが理事会に提示された。そして、評議員会に意見を諮り、その承認を経て、工学部の募集停止が最終決定した。理事会は、事後措置として、理事会の翌日にマスコミに対し会見発表するとともに、学生・保護者・同窓会へ募集停止に至った経緯を説明した。募集停止後の教育体制、在学生の支援体制および新学部構想に関しては、大学改革検討委員会に検討が諮問された。

学生募集の停止以降、大学改革検討委員会のもとに「工学部検討小委員会」が設置され、理工学系統の新たな教育組織構築の検討がなされ、北部九州の産業に対応した自動車産業を中心とする学部、生産現場におけるリーダーとなり得る工学マネジメント関係学部、医療現場において必要とされる医療工学関係学部などの可能性に関して検討が行われた。しかし、新学部の案を作成するまでには至らず、また経営的に成り立つような工学系の学部を設置することは現時点では難しいとの判断がなされ、新たな理工学系学部の開設も断念した。

現在、工学部には87名の在学生在が勉学と卒業研究に励んでいる。昭和42年に開設し昭和45年に第1回生91名を卒業させてから平成21年度までの40年間に10,639名の卒業生を輩出した工学部は、在学生在が全員卒業した時点で廃部になる。この間、図-1に示されるように、第1回生が卒業してから順調に卒業生の増加がみられ昭和53年度には300名以上が大学を巣立っていった。特に、建築学科と土木工学科の2学科の卒業生が半数以上を占めていた。その後、急激に卒業生数が減少し、昭和59年度には100名を切る状況になった。

しかし、1年後には、反転に転じ、その後は第2次ベビーブームの追い風を受けて、急激に卒業生数が増大し、平成6年度から13年度までは400名を超える学生が卒業を果たし、社会に巣立っていった。それ以降は、18歳人口の減少と理系離れ、および工学部における教育改革の遅れによる卒業生数の急激な減少に至った。在学生在87名全員が無事卒業すると、今年度の秋期卒業生3名を加えて、工学部全卒業生は10,729名となる。

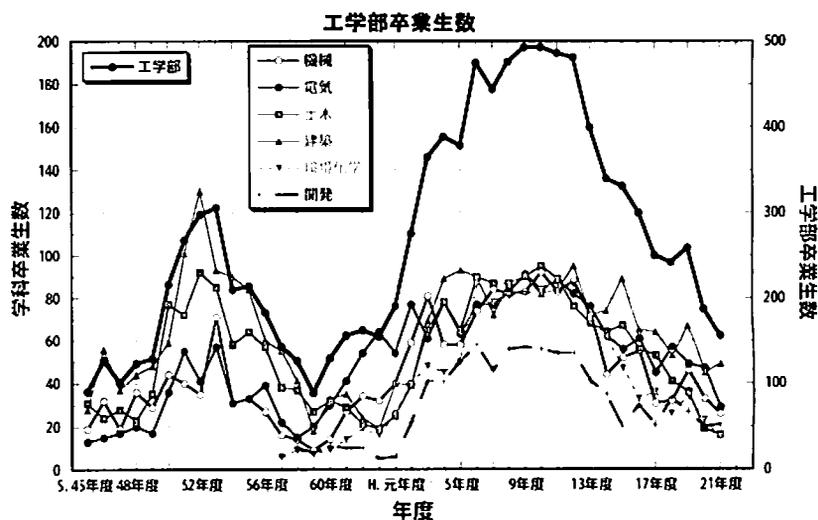


図-1 工学部全体の卒業生数と各学科の卒業生数の変遷

機械工学科・メカエレクトロニクス学科の歩み

メカエレクトロニクス学科長 山本 普康

当学科は、機械工学に関する知識・技術を幅広く学ぶ機械工学科として、昭和42年度(1967年度)に発足した。当初はコース区分が無かったが、昭和59年度(1984年度)から機械コースとロボットコースが設置された。その後、我が国における機械工学の発展と社会のニーズに応じて、平成15年度(2003年度)にコース名がシステムコースとソフトウェアコースに変更された。さらに、平成17年度(2005年度)には、電気・電子のハード部門と機械工学科を統合して、学科名がメカエレクトロニクス学科に改称された。同時に、エコエネルギーコース、ロボティクスコース、エアロスペースコースの3コースが設置された。

1. 学科名称とコース名称

西暦	元号	工学部	学科名	コース名
1970	昭和45	1期生	機械工学科	—
1971	昭和46	2期生	機械工学科	—
1972	昭和47	3期生	機械工学科	—
1973	昭和48	4期生	機械工学科	—
1974	昭和49	5期生	機械工学科	—
1975	昭和50	6期生	機械工学科	—
1976	昭和51	7期生	機械工学科	—
1977	昭和52	8期生	機械工学科	—
1978	昭和53	9期生	機械工学科	—
1979	昭和54	10期生	機械工学科	—
1980	昭和55	11期生	機械工学科	—
1981	昭和56	12期生	機械工学科	—
1982	昭和57	13期生	機械工学科	—
1983	昭和58	14期生	機械工学科	—
1984	昭和59	15期生	機械工学科	—
1985	昭和60	16期生	機械工学科	—
1986	昭和61	17期生	機械工学科	—
1987	昭和62	18期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1988	昭和63	19期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1989	平成1(昭和64)	20期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1990	平成2	21期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1991	平成3	22期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1992	平成4	23期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース

西暦	元号	工学部	学科名	コース名
1993	平成5	24期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1994	平成6	25期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1995	平成7	26期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1996	平成8	27期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1997	平成9	28期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1998	平成10	29期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
1999	平成11	30期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
2000	平成12	31期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
2001	平成13	32期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
2002	平成14	33期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
2003	平成15	34期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
2004	平成16	35期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
2005	平成17	36期生	機械工学科	機械コース・ロボットコース
2006	平成18	37期生	機械工学科	システムコース・ソフトウェアコース
2007	平成19	38期生	機械工学科	システムコース・ソフトウェアコース
2008	平成20	39期生	メカエレクトロニクス学科	エコエネルギーコース・ロボティクスコース・エアロスペースコース
2009	平成21	40期生	メカエレクトロニクス学科	エコエネルギーコース・ロボティクスコース・エアロスペースコース
2010	平成22	41期生	メカエレクトロニクス学科	エコエネルギーコース・ロボティクスコース・エアロスペースコース

2. 教員名と在職期間

着任した年		教員名	資格	在職期間	
西暦	元号			西暦	元号
1967	昭和42	竹内登一	主任教授	1967～1978	昭和42～昭和53
			教授	1979	昭和54
			特任教授	1980	昭和55
		末光俊介	教授	1967～1977	昭和42～昭和52
			客員教授	1978	昭和53
		池田美穂	助教授	1967～1973	昭和42～昭和52
		井上信吾	助教授	1967～1978	昭和42～昭和53
		藤原正孝	講師	1967～1970	昭和42～昭和45
			助教授	1971～1981	昭和46～昭和56
教授	1982～1993		昭和57～平成5		
1976	昭和51	山田慶紀	教授	1976～1982	昭和51～昭和57
		木村和男	助教授	1976～1982	昭和51～昭和57
			教授	1983～1994	昭和58～平成6
		千田相良	講師	1976～1979	昭和51～昭和54
1977	昭和52	砂本章	教授	1977～1983	昭和52～昭和58

着任した年		教員名	資格	在職期間	
西暦	元号			西暦	元号
1977	昭和52	佐藤征一	講師	1977～1978	昭和52～昭和53
			助教授	1979～1988	昭和54～昭和63
			教授	1989～2004	平成1(昭和64)～平成16
1977	昭和52	浜田一夫	助手	1977～1978	昭和52～昭和53
1979	昭和54	上滝具貞	教授	1979～1990	昭和54～平成2
			特任教授	1991	平成3
1982	昭和57	七田克彦	講師	1982～1985	昭和57～昭和60
1984	昭和59	谷本勇	教授	1984～1985	昭和59～昭和60
1984	昭和59	藤原義也	講師	1984～1987	昭和59～昭和62
			助教授	1988～1994	昭和63～平成6
			教授	1995～2009	平成7～平成21
1986	昭和61	清水茂俊	教授	1986～1992	昭和61～平成4
		村岡俊夫	助教授	1986～1987	昭和61～昭和62
			教授	1988～1999	昭和63～平成11
1987	昭和62	上條恵右	講師	1987～1991	昭和62～平成3
			助教授	1992～2006	平成4～平成18
			准教授	2007	平成19
1988	昭和63	吉富佐	教授	1988～2002	昭和63～平成14
		佐藤浩司	助手	1988	昭和63
1989	平成1(昭和64)	生田宏	助手	1989～2007	平成1(昭和64)～平成19
			助教	2008～2010	平成20～平成22
1991	平成3	三石信雄	教授	1991～1997	平成3～平成9
1991	平成3	安積則義	助手	1991～1997	平成3～平成9
1992	平成4	松永成徳	教授	1992～1998	平成4～平成10
1993	平成5	大森正信	教授	1993～1995	平成5～平成7
		小山田哲也	教授	1993～2003	平成5～平成15
		種田元治	教授	1993～1995	平成5～平成7
		中島正三郎	教授	1993～2005	平成5～平成17
1995	平成7	高嶋邦秀	講師	1995～1996	平成7～平成8
1996	平成8	佐木邦夫	教授	1996～1998	平成8～平成10
		渡辺和夫	教授	1996～2004	平成8～平成16
1998	平成10	宮入嘉夫	教授	1998～2010	平成10～平成22
1999	平成11	宇野美津夫	講師	1999～2001	平成11～平成13
			教授	2002～2010	平成14～平成22
		山本普康	教授	1999～2010	平成11～平成22
		水井雅彦	助手	1999～2007	平成11～平成19
助教	2008～2010		平成20～平成22		
2000	平成12	郝明暉	教授	2000～2002	平成12～平成14

着任した年		教員名	資格	在職期間	
西暦	元号			西暦	元号
2003	平成15	江口弘文	教授	2003～2010	平成15～平成22
		川嶋竜之介	助手	2003～2007	平成15～平成19
			助教	2008～2010	平成20～平成22
2005	平成17	山口静夫	教授	2005～2010	平成17～平成22
2005	平成17	生地文也	教授	2005～2010	平成17～平成22
2006	平成18	成田寛治	特任教授	2006～2008	平成18～平成20
2008	平成20	兼田楨宏	特任教授	2008～2010	平成20～平成22

3. 卒業人数

年度		工学部	卒業人数	年度		工学部	卒業人数
西暦	元号			西暦	元号		
1970	昭和45	1期生	19名	1991	平成3	22期生	81名
1971	昭和46	2期生	32名	1992	平成4	23期生	58名
1972	昭和47	3期生	19名	1993	平成5	24期生	58名
1973	昭和48	4期生	36名	1994	平成6	25期生	74名
1974	昭和49	5期生	29名	1995	平成7	26期生	84名
1975	昭和50	6期生	44名	1996	平成8	27期生	82名
1976	昭和51	7期生	40名	1997	平成9	28期生	83名
1977	昭和52	8期生	35名	1998	平成10	29期生	92名
1978	昭和53	9期生	71名	1999	平成11	30期生	83名
1979	昭和54	10期生	31名	2000	平成12	31期生	88名
1980	昭和55	11期生	33名	2001	平成13	32期生	72名
1981	昭和56	12期生	27名	2002	平成14	33期生	44名
1982	昭和57	13期生	16名	2003	平成15	34期生	52名
1983	昭和58	14期生	14名	2004	平成16	35期生	55名
1984	昭和59	15期生	9名	2005	平成17	36期生	31名
1985	昭和60	16期生	14名	2006	平成18	37期生	32名
1986	昭和61	17期生	27名	2007	平成19	38期生	46名
1987	昭和62	18期生	34名	2008	平成20	39期生	33名
1988	昭和63	19期生	32名	2009	平成21	40期生	26名
1989	平成1(昭和64)	20期生	40名	2010	平成22	41期生	21名
1990	平成2	21期生	59名				

4. 学科の年中行事

- (1) 新入生歓迎会 (皿倉登山、焼き肉パーティ、スペースワールド)
- (2) 工場見学 (安川電機(株)黒崎工場、日産(株)荏田工場)
- (3) 卒業研究発表会

メカエレクトロニクス学科研究室の紹介

メカエレクトロニクス学科 4年生 服鳥 洋
合田 明德
廣永 貴美

宇野研究室

研究生 07A1706 久保 涼平
07A1725 森 健亮
07A1727 有村 麻莉絵
指導教員 宇野 美津夫 教授
川嶋 竜之介 助教



1. 研究テーマ

「翼形状の異なるタイプの水中ポンプの特性とキャビテーション性能」

2. 研究概要

ポンプの効率低下の原因になるキャビテーションという気泡の発生状態の確認をした。運転時に圧力を下げ、その時の騒音状態を測定することでキャビテーションの発生状態を確認した。

3. 感想

研究生 企業の方と一緒に実験する事ができ、とても勉強になりました。

宮入研究室

研究生 05A1733 服鳥 洋
07A1708 合田 明德
07A1723 廣永 貴美
指導教員 宮入 嘉夫 教授
上野 俊幸 技師



1. 研究テーマ

「小型風車の発電特性」

2. 研究概要

持続可能な風力のエネルギーから電力を創り出す実験、データ解析を通じて発電のメカニズムや風力エネルギーの特徴を修得した。また、風車の羽根の角度などを変更して、性能向上についての机上検討と実験の両面から検討を行った。

3. 感想

研究生 4年間の学生生活はとても楽しく、多くのことを学びました。

研究生 有意義な学生生活を過ごすことができました。

指導教員 考える(洞察)、歩く(実行)、立ち止まる(反省)の繰り返しが人生。失敗を恐れずに果敢にチャレンジ!

江口研究室

研究生 08A7102 佐藤 隆久
 07A1701 赤嶺 大雄
 07A1715 竹重 紀志
 07A1718 中原 真純
 指導教員 江口 弘文 教授
 下村 英美 技師



1. 研究テーマ

「救助ロケットの研究」

2. 研究概要

ペットボトルロケットをベースにした、川の中州などで救助を待つ被災者に救助ロープを届けるシステムの開発である。ペットボトルロケットに釣り糸を曳航させて落下傘で降下させ、被災者に釣り糸を手操らせることによって救助ロープを届けることが狙いである。

3. 感想

研究生 100米級の救助ロケットを完成できました。ただし、強風に弱いのが弱点です。

能智研究室

研究生 07A1703 大森 穰
 07A1710 阪本 陣
 指導教員 能智 紀台 教授



1. 研究テーマ

「色素増感型太陽電池の開発」

2. 研究概要

太陽エネルギーを用いた太陽電池は地球温暖化及びエネルギー資源の枯渇対策としてますます期待される。なかでも我々が目指す色素増感型太陽電池は、大幅なコストダウン及び高効率が可能技術として注目されている。

3. 感想

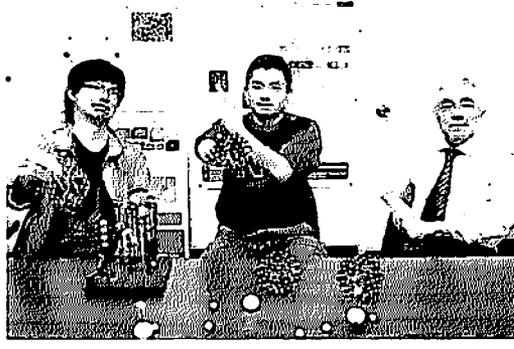
研究生 最後まで気を抜かず頑張ります。

研究生 努力してきた過程を無駄にしない為にも、最後まで集中して優秀の美を飾りたいです。

指導教員 本研究は、高分子のフィルム上に、斜め蒸着法を適用した色素増感型太陽電池を目指すものであり、内外の研究機関から注目されています。先端研究のもつ泥臭い過程をぜひ体験してほしい。

生地研究室

研究生 07A1711 佐藤 孝幸
07A1712 尻無濱 隆宏
指導教員 生地 文也 教授



1. 研究テーマ

「低圧メタンプラズマによる新規の炭素物質の合成 IV」

2. 研究概要

炭素物質はグラファイトやダイヤモンド、そしてフラーレンやナノチューブなど、様々な形態をとることが知られている。本研究では、独自のメタンプラズマCVD法を使って、シリコン基板におけるダイヤモンド薄膜の合成が狙いである。

3. 感想

研究生 苦しい時には、みんなと助け合い、楽しい時はみんなと盛り上がり笑って、時には悩む事もあったけど、充実した楽しい毎日を送る事が出来ました。

研究生 この4年間で、海パン1枚で、人前で踊ったり、後頭部をハート形のヘアースタイルにしたり、女装で大学祭に参加したりと、大学生でなければ出来ない無茶な事を多くしました。私は大学生生活4年間を楽しみました。

指導教員 世界が注目するような新材料を創る、あるいは新現象を見つける。そんな夢を学生・院生と追いかけてきました。自ら疑問を發し、自ら求める姿勢が大切、そこから本当のことが見えてくる。科学時代の知識の獲得を目指して進もう。

山口研究室

研究生 07A1713 砂川 寛貴
07A1717 沈 偉
指導教員 山口 静夫 教授



1. 研究テーマ

「高出力カラーLEDによる近未来遊園地模型用ドーム型照明の開発」

2. 研究概要

将来の遊園地を想定した太陽電池等の「クリーンエネルギーで動作する近未来遊園地模型」の照明法を検討し、その開発を行った。具体的には、遊園地を覆うドームを作成し、それに高出力カラーLEDを一定間隔に取り付けて赤、緑および青などの7色による照明を行うことができた。

3. 感想

指導教員 本年度で工学部が閉じることは誠に残念です。しかしながら、先輩をはじめ諸君には本学工学部の教育や研究の思想が一貫して流れていますので、誇りを持っていっそうの飛躍を期待します。

兼田研究室

研究生 07A1722 信末 健・
 07A1724 宮井 良祐
 指導教員 兼田 横宏 教授
 水井 雅彦 助教



1. 研究テーマ

「移動ロボットにおける操作性に関する研究」

2. 研究概要

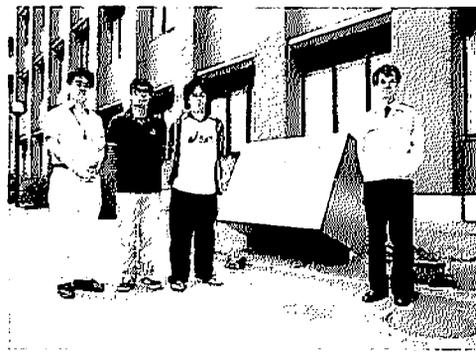
私達は、四足歩行ロボットを使用し、「子供でも簡単に操作できるロボット」をテーマに研究を進めた。学園祭などのイベントに参加し、遊びに来てくれた子供にロボットの操作体験をしてもらい感想や改善点を聞き、ロボットの性能改善を行った。

3. 感想

研究生 最高の友に出会えてよかった！共立大学ばんざい！

山本研究室

研究生 07A1704 兼松 大輔
 07A1726 川副 健太郎
 指導教員 山本 普康 教授
 生田 宏 助教
 下村 英美 技師
 池田 一男 技師



1. 研究テーマ

「ステンレス鋼冷間圧延の高光沢表面形成技術に関する研究」

2. 研究概要

ステンレス鋼の冷間圧延では、ロール表面粗さや圧延入側材料の表面粗さ、潤滑油組成・粘度、圧延温度・圧延速度等の調整と制御が図られており、圧延鋼板の表面性状と潤滑油の密接な関係を考慮しながら摩擦係数を制御することが重要な課題である。本研究では、1パス目に#800軸方向研磨ロールと#800円周方向研磨ロール、2パス目に#2000ランダム研磨ロールを使用して冷間圧延し、摩擦係数や圧延鋼板の表面特性(光沢度、表面粗さ、平坦率)に及ぼすロール表面研磨方法と圧延パスの影響を検討した。その結果、1パス目に軸方向研磨ロールを用いて圧延し、2パス目に#2000ランダム研磨ロールで圧延すると、2パス目圧下率が約20%以上では圧延方向に垂直な線状疵が消失し、光沢度が向上することが明らかになった。

3. 感想

研究生 大学生生活最後の研究が皆さんのお力添えで成功したことを嬉しく思い感謝しています。

指導教員 学生さん達の真面目な努力で技術的・学術的に大きく貢献できる研究が出来たことを大変感謝しています。

国際会議 (ISLCT2010) に参加して

メカエレクトロニクス学科 4年生 有村 麻莉絵

1. はじめに

2010年11月15日より韓国済州島(Jeju)のロッテホテルで行われた国際会議(ISLCT2010-International Symposium on Low Carbon & Renewable Energy Technology)に私は参加しました。国際会議の参加は生まれて初めての経験でした。

この国際会議は、今回が二回目で、日本、韓国、中国などのアジアを中心とする各国の大学及び企業が、風力、水力、太陽光、地熱、バイオマス、海洋エネルギーなどの再生可能エネルギーに関する技術と普及政策について発表及び討論する場であり、参加者は約200人の大きな国際会議でした。また発表者のほとんどが再生可能エネルギーを専門とした企業研究者、大学教員が主体で、学生も参加、発表していましたが博士後期課程の大学院生が多く、学部4年生である私には会議のレベルの高さを実感しました。

私は編入学で九州共立大学に入学し、学生生活最後の年に今後の社会人生活にも役立つ経験がしたいと思い、卒業論文テーマであるマイクロ水力発電に関する発表を行いました。

2. 韓国の再生可能エネルギーについて

開催国でもある韓国は日本と同様資源エネルギーが乏しい国で、政府支援もあり、開発段階-商品化段階-普及段階のすべての段階に対する支援を含むプロジェクト型技術開発事業が推進されていることが分かりました。また連携機能を確保するため、実用化評価事業を持続的に拡大支援しており、「チーム韓国」一体で力を入れていることも分かりました。

Googleマップ

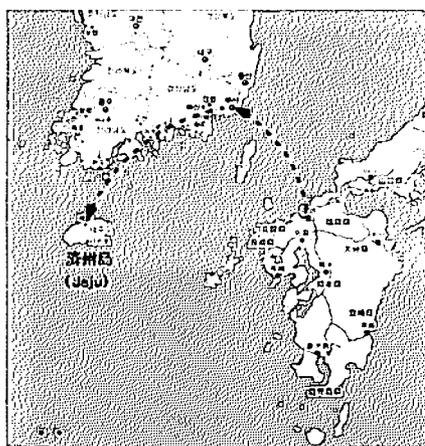


図-1 済州島(釜山経由で済州島へ)



図-2 学会会場 (ロッテホテル)

今回の国際会議で私自身が一番興味を持った技術は波力発電技術でした。波力発電は波が上下振動する際の高低差を利用して波力発電装置に内蔵したタービンを回転させ、電力を得るものです。日本では、平成22年に、実験装置を建設し、その後、実証試験が行われる予定とのことですが、他国と比べるとその動きが若干遅いように感じました。韓国は海洋発電に最も力を入れており発表やポスターも数多く見られましたが、ほかの再生エネルギーにも力を入れていることがすごく感じられました。

3. 国際会議での発表

私が発表を行った「マイクロ水力発電」とは、出力100kW以下の水力発電を指します。従来のダムを利用した大規模水力発電に比べ、出力が低い割には、設置コストが大きいと、商用利用する上では課題が山積しています。しかし、環境保護や地球温暖化防止の観点から河川や海の流れなどの低速水流がもつ再生可能エネルギーを積極的に利用する兆しが国内でも高まりつつあります。私が所属する工学部物理研究室では、流れ場に置かれた物体から離脱するカルマン渦が原因となって物体自身が振動する現象、いわゆる流体関連の振動現象を発電に応用できないかと考え、コイル及び磁石を内蔵した二本の円柱振動による振動型水力発電の実用化と今後の改善点について発表を行いました。

マイクロ水力発電に関する発表は私を含めて7件ありましたが、どれもがいわゆる水車の構造をなしたものを対象としていました。他の参加者の方に伺ったところ、私が研究している流体関連振動を利用した水力発電は機構としてはとてもユニークであること、そして従来の水車型では発電できない極めて低速水流でも、発電できる可能性を持ったものであることがわかりました。発表時間は15分、質疑応答の時間は5分で普段だと短く感じる時間ですが実際に自分が発表してみると時間の長さを実感しました。すべて英語のプレゼンテーションだったので発音の正確さに気をつけて聞きとりやすいように心がけて発表しました。発表に対する質問も当然、英語でした。最初の質問は、九州工業大学の先生から頂き、比較的聞き取りやすく配慮して頂いた英語だったので、答えることができました。しかし、中国、韓国の方から質問を受けた時はイントネーションの違いなどで聞きなおし、時間を使ってしまいました。また質問に対し自分が言いたいことが英語で出てこなくて同行の先生にサポートしてもらったのが反省点であり今後の自分の課題となりました。

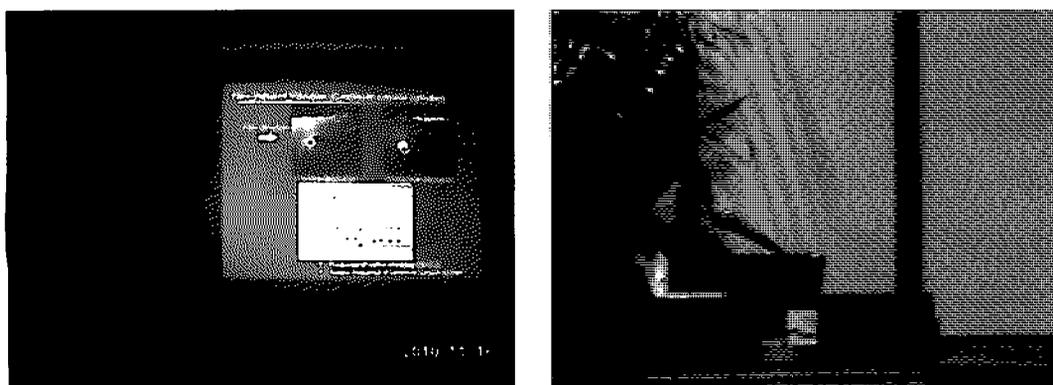


図-3 発表の様子



図-3 学会会場にて



図-4 Mr.Mun-Oh KIM 氏とバンケットにて

4. 国際会議で得たもの

今回の国際会議では韓国の学生と親交を持って気づいたことが多くありました。それは、積極性の違いでした。自分たちの研究していることやこれからどのようにこの研究が役立つのかということを開かれ、私たち日本人学生はこのような質問に対応できるだろうか、ましてや、異国の人に母国語ではない言葉で説明できるかといわれたら多分できないだろうと感じました。学会バンケットで同席したKorea Maritime Universityの大学院生Mr.Mun-Oh KIM氏は、流暢な英語ではなかったですが、英語でなんとか私に何かを伝えようとする意思が感じられ、その積極さに驚きました。

5. おわりに

この国際会議への参加を通して、学部生でこのような貴重な体験ができて大変有意義でした。同時に、もっと早い段階でこういう経験をしておけばよかったと感じました。また、多くの九州共立大学学生にこのような経験して欲しいと思いました。この先、更に国際化が進む中で、対等に意見の交換ができるよう準備するということが学生生活で大切ではないかと感じました。

最後に今回の国際会議参加に際して、メカエレクトロニクス学科の先生、工学会関係者の皆様には多大なご支援を頂きましたことに対し謝意を表します。

6. 追記

平成23年1月27-28日、北九州市でJapan-Korea Joint Seminar 2011 for Sustainable Energy Exploitations が開催されます。日韓の大学生が風力や水力などの再生可能エネルギーについて発表する場であり、韓国学生側からのリクエストによって、私も参加、発表のチャンスを得ました。韓国での発表経験を活かして、よいプレゼンテーションができるよう努めると共に、再度、韓国学生と交流が持てることに期待を膨らませています。

電気工学科・電気電子情報工学科・情報学科の歩み

情報学科長 久保田 信久

1. 学科の名称・コースの変遷

当学科は、電気工学や電子工学に関する技術を幅広く学ぶ電気工学科として昭和42年度に発足した。当初は電気コースと電子コースの二つのコースだけであったが、その後の我国経済の発展と社会の情報化ニーズに応じて情報コースが設置された。また平成13年度からは、学科の内容と学科名の整合性を図るために学科名称を電気電子情報工学科と変更した。さらに平成17年度の工学部の学科再編に伴い、電気や電子のハード部門はメカエレクトロニクス学科に統合され、ソフト部門だけが独立して情報学科となった。

年 度	学科名	コース・過程
1967-1968 (S42) (S43)	電気工学科	コース分けせず
1969-1983 (S44) (S58)	電気工学科	電力課程 電子課程
1984-2000 (S59) (H12)	電気工学科	電気コース 電子コース 情報コース
2001-2002 (H13) (H14)	電気電子情報工学科	電気コース 電子コース 情報コース
2003-2004 (S15) (H16)	電気電子情報工学科	電気システムコース 電子情報コース 情報メディアコース
2005-2006 (S17) (H18)	情報学科	情報メディアコース コンピュータ応用コース
2007- (S19)	情報学科	情報メディアコース 情報デザインコース

2. 教職員名と在職期間

	氏名	在職期間
教授	溝口 研吾	1968-1980
	牧 元	1969-1976
	浜砂 兵吉	1969-1979
	守 誠一	1973-1991
	渡辺 正住	1977-1987
	池田 修蔵	1975-1986
	高崎 重雄	1969-1981
	岡本 辰美	1979-1992
	佐伯 節夫	1988-1992
	権藤 靖夫	1992-1996
	安在 弘幸	1993-2002
	榎木田 仁水	1970-2007
	野沢 忠生	1994-2006
	楢垣 勝	1993-2006
	福田 順子	1986-2005
	藤井 邦夫	1996-2004
	松枝 宏明	1978-2005
	嶺 勝敏	1992-1999
	緒方 純俊	2003-2006
	今村 恭巳	2006-2007
	生地 文也	1993-
	内富 昭三	1999-
	久保田 信久	1982-
山口 静夫	1994-	
守 啓祐	2007-	
助教授	今泉 政雄	1968-1975
	半田 栄	1968-1972
	萩原 益雄	1986-1992
	末安 久利	1986-1994
	眞田 瑞穂	1989-
	八尋 秀一	1994-1995
鄭 俊如	2005-2009	

	氏名	在職期間
講師	須志田 昭一	1975-1975
	鈴木 勲	1974-1977
	宮川 隆寛	1976-1981
	大串 侃	1982-1986
	平原 貴行	1995-
助教	森元 史朗	1992-
	池本 友洋	2003-
助手	小野 正美	1968-1970
	松本 春利	1972-1973
	宮内 真人	1988-1992
	後迫 豊和	1994-1996
	瀬戸 雄士	1994-1995
	武石 幸人	1994-1996
	藤井 聖三	1994-1995
	八尋 秀一	1994-1995
	原園 力生	1997-
技師・技能員	柏木 正生	1974-1987
	小林 三郎	1974-1987
	手塚 顕太郎	1975-1984
	山口 耕生	1987-1996
	太田 雄二	1991-1994
	片江 正司	1988-1999
	釘崎 郁英	1987-2002
	岡崎 英機	1999-
大野 政春	2002-	
事務	白石 直子	1987-2007

3. 年度別卒業生数

年 度	電気工学科	電気電子情報 工学科	情報学科
1970 (S45)	13		
1971 (S46)	15		
1972 (S47)	17		
1973 (S48)	20		
1974 (S49)	17		
1975 (S50)	36		
1976 (S51)	55		
1977 (S52)	41		
1978 (S53)	57		
1979 (S54)	31		
1980 (S55)	33		
1981 (S56)	39		
1982 (S57)	22		
1983 (S58)	15		
1984 (S59)	20		
1985 (S60)	30		
1986 (S61)	41		
1987 (S62)	54		
1988 (S63)	64		
1989 (H01)	54		
1990 (H02)	77		
1991 (H03)	61		
1992 (H04)	78		
1993 (H05)	63		
1994 (H06)	77		
1995 (H07)	77		
1996 (H08)	83		
1997 (H09)	91		
1998 (H10)	84		
1999 (H11)	88		
2000 (H12)	82		
2001 (H13)	76		
2002 (H14)	62		
2003 (H15)	56		
2004 (H16)	4	57	
2005 (H17)	1	44	
2006 (H18)	1	56	
2007 (H19)		49	
2008 (H20)		7	40
2009 (H21)		3	26

4. 学科の年中行事

- 4月 入学式、新入生オリエンテーション、履修指導、新入生歓迎行事
- 5月 キャリア面談
- 8、9月 保護者懇談会
オープンキャンパス
- 10月 キャリア面談
- 11月 学外研修、大学祭、
オープンキャンパス
- 2月 卒業研究発表会
- 3月 卒業式、卒業茶話会



図-1 入学式



図-2 新入生歓迎会

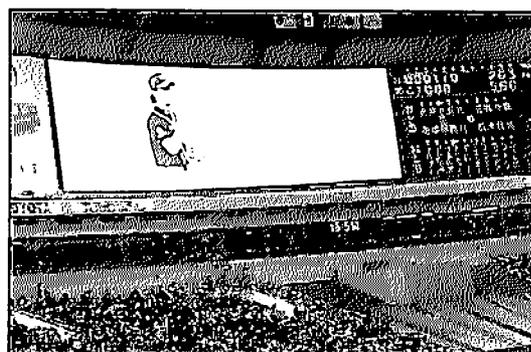


図-3 学外研修

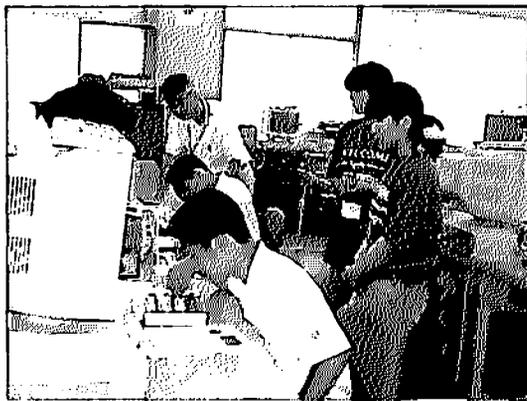


図-4 オープンキャンパス

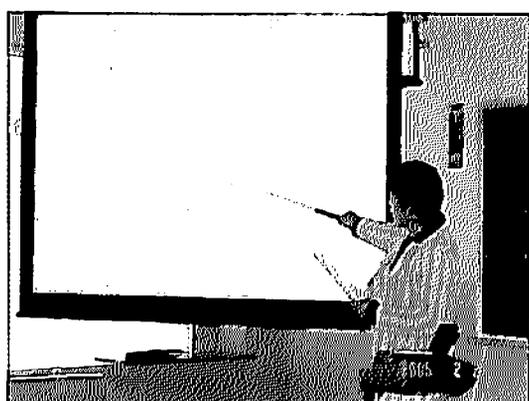


図-5 卒業研究発表会

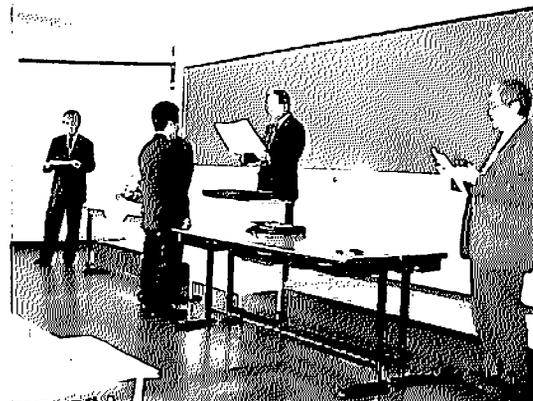


図-6 卒業式

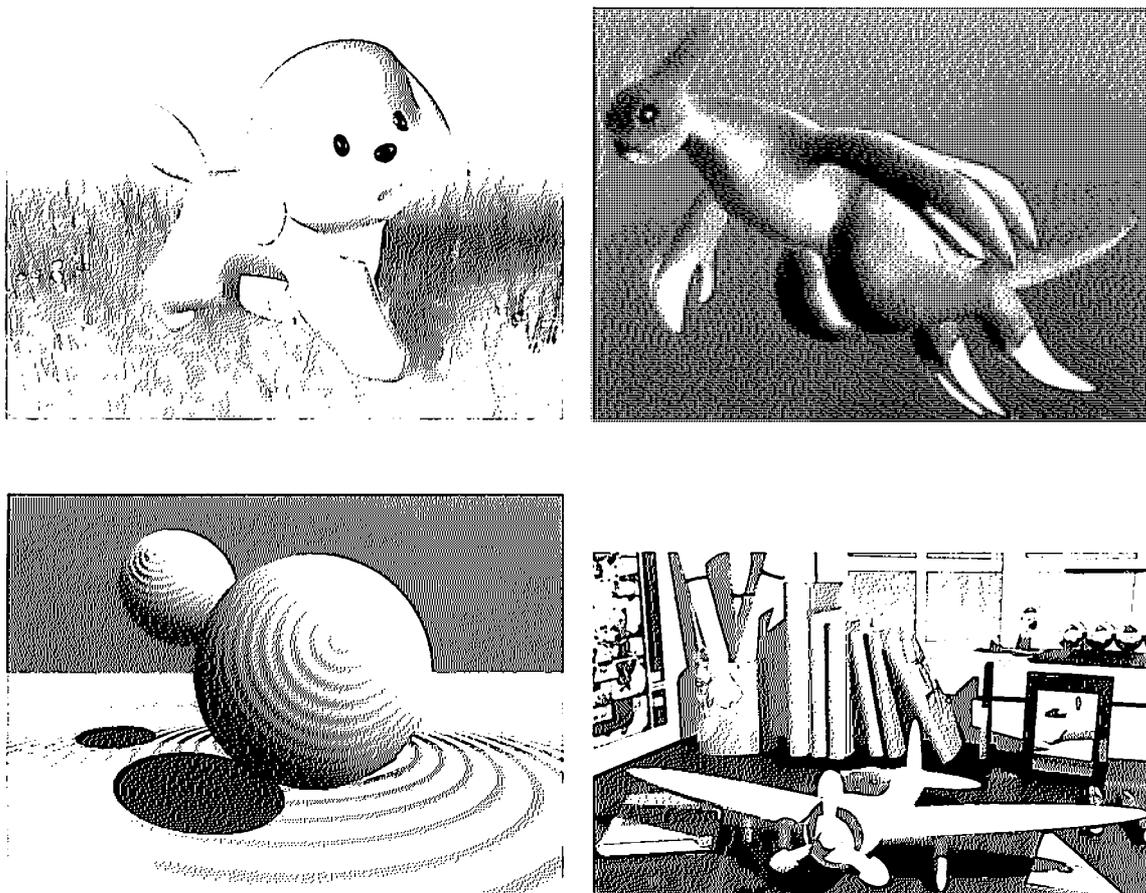


図-7 卒業研究の一環として制作したコンピュータグラフィックスの作品群

5. その他

情報処理分野の資格（昭和 63 年～平成 20 年）

- ・情報処理技術者試験 19 名が本学科在学中に合格
- ・初級システムアドミニストレータ試験 5 名が本学科在学中に合格

在学中に取得可能な主な資格

- ・電気主任技術者学校認定
 電気主任技術者(第 1 種、第 2 種、第 3 種)免状申請の際に学科試験が免除される
- ・無線従事者免許
 第 1 級陸上特殊無線技士・第 2 級海上特殊無線技士・第 3 級海上特殊無線技士
- ・教員免許
 高等学校第 1 種免許状（数学，工業）
 中学校第 1 種免許状（数学）

主な教育施設

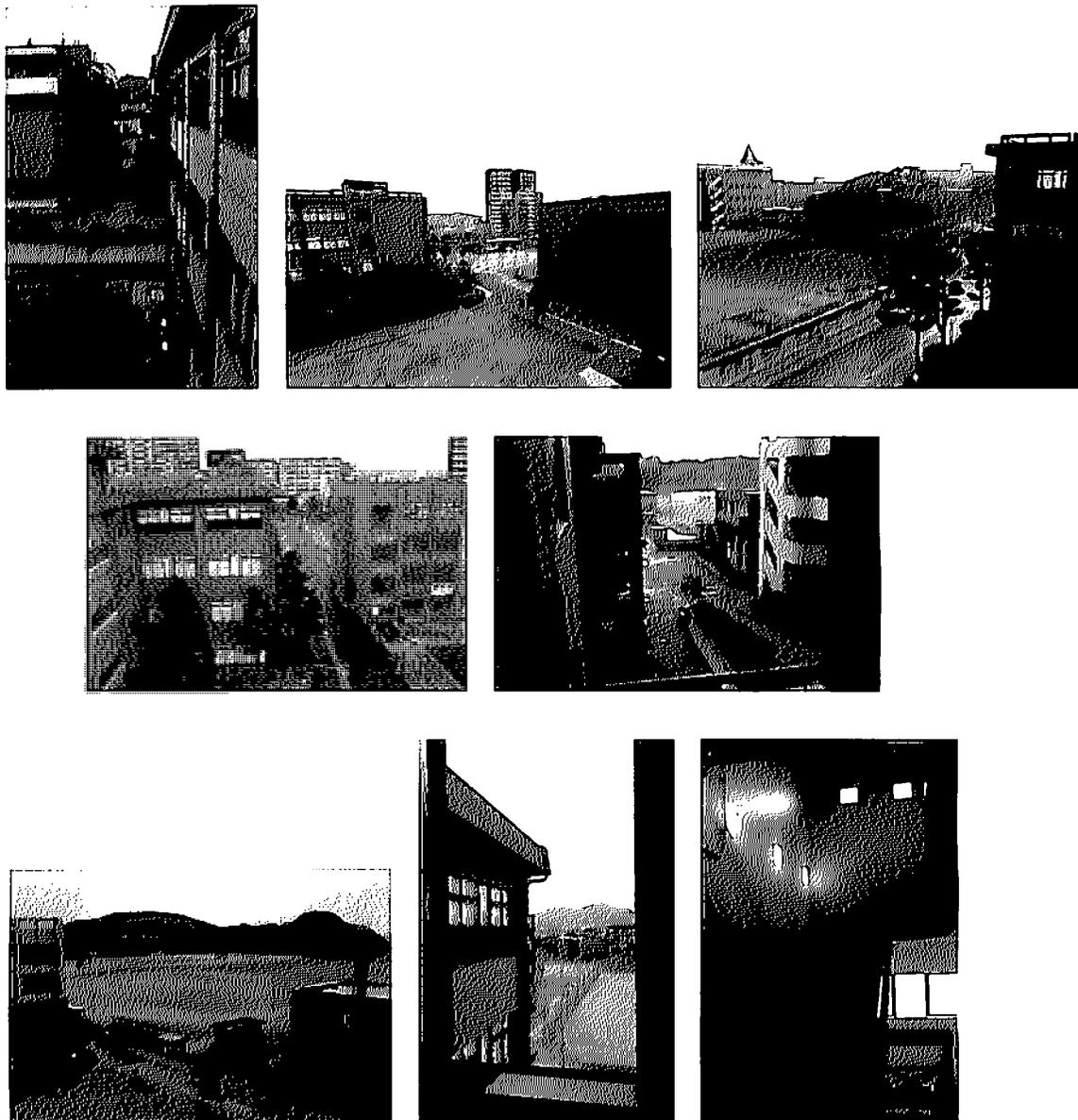
- ・電気基礎実験室、電気機器実験室、高電圧実験室、照明実験室、電子工学実験室
 通信工学実験室、情報工学実験室、パソコン演習室

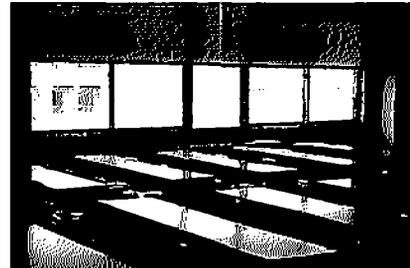
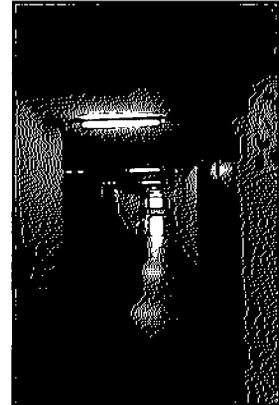
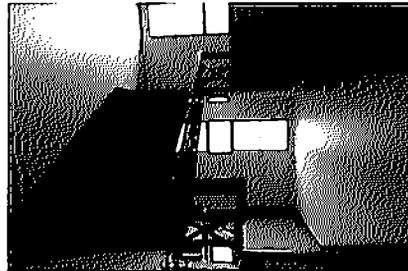
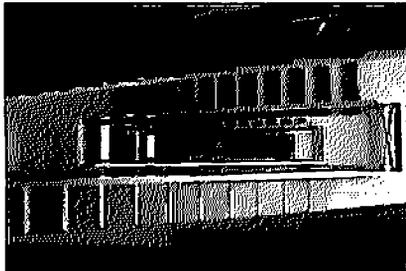
第2学舎の記憶

情報学科 4年生 高橋 敬和

1. 第2学舎から見た景色

下に載せた写真は、第2学舎から撮影したものである。私たち情報学科の学生は、常日頃からこの景色を見て学校生活を過ごしてきた。この度、長年の歴史をもつ工学部の廃止に伴い、情報学科も廃止となる。そこで、この場を借りて私たちが見てきた景色をここに残そうと思う。





2. あとがき

これらの写真を観て、どこから撮影したのか分かる者がいたのなら、その者は真面目に学校に通っていたのだろうと思われる。私たちが過ごしたこの場所を忘れないでほしい。

土木工学科・都市システム工学科・環境土木工学科の歩み

環境土木工学科 学科長 牧角 龍憲
講師 野 曙光

1. 学科名称とコース名称の変遷

環境土木工学科は、昭和42年4月に設立された工学部4学科の一つである土木工学科として発足した。その後、都市の整備および再開発事業が盛んになり、都市の機能を守り、維持するためのシステムの構築が要望されていたため、平成17年度から都市システム工学科に名称変更した。次いで、平成19年度には、従来の都市システム工学科と環境サイエンス学科が発展的に統合し、両学科の中心的な教育研究領域を柱に「防災」と「環境」という2つの重要なテーマに対応する新しい学科として生まれ変わり、環境土木工学科に名称変更した。表-1に学科名称とコース名称の変遷を示す。

表-1 学科名称とコース名称の変遷

西暦	元号	工学部	学科名	コース名
1970年	昭和45年	1期生	土木工学科	—
1971年	昭和46年	2期生	土木工学科	—
1972年	昭和47年	3期生	土木工学科	—
1973年	昭和48年	4期生	土木工学科	—
1974年	昭和49年	5期生	土木工学科	—
1975年	昭和50年	6期生	土木工学科	—
1976年	昭和51年	7期生	土木工学科	—
1977年	昭和52年	8期生	土木工学科	—
1978年	昭和53年	9期生	土木工学科	—
1979年	昭和54年	10期生	土木工学科	—
1980年	昭和55年	11期生	土木工学科	—
1981年	昭和56年	12期生	土木工学科	—
1982年	昭和57年	13期生	土木工学科	—
1983年	昭和58年	14期生	土木工学科	—
1984年	昭和59年	15期生	土木工学科	—
1985年	昭和60年	16期生	土木工学科	—
1986年	昭和61年	17期生	土木工学科	—
1987年	昭和62年	18期生	土木工学科	構造コース・土木コース
1988年	昭和63年	19期生	土木工学科	構造コース・土木コース
1989年	平成元年	20期生	土木工学科	構造コース・土木コース
1990年	平成2年	21期生	土木工学科	構造コース・土木コース
1991年	平成3年	22期生	土木工学科	構造コース・土木コース
1992年	平成4年	23期生	土木工学科	構造コース・土木コース
1993年	平成5年	24期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
1994年	平成6年	25期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
1995年	平成7年	26期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
1996年	平成8年	27期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
1997年	平成9年	28期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
1998年	平成10年	29期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
1999年	平成11年	30期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
2000年	平成12年	31期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
2001年	平成13年	32期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
2002年	平成14年	33期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
2003年	平成15年	34期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
2004年	平成16年	35期生	土木工学科	建設管理コース・計画設計コース
2005年	平成17年	36期生	都市システム工学科	都市デザインコース・都市テクノコース
2006年	平成18年	37期生	都市システム工学科	都市デザインコース・都市テクノコース
2007年	平成19年	38期生	環境土木工学科	シビルデザインコース・エコサイエンスコース
2008年	平成20年	39期生	環境土木工学科	シビルデザインコース・エコサイエンスコース
2009年	平成21年	40期生	環境土木工学科	シビルデザインコース・エコサイエンスコース
2010年	平成22年	41期生	環境土木工学科	シビルデザインコース・エコサイエンスコース

2. 教職員名と在職期間

昭和42年に発足してから現在までの43年間、多くの教職員が学生の教育に携われた。表-2は教職員名と在職期間を示す。

表-2 教職員の在職期間一覧表

	氏名	在職期間		氏名	在職期間	
教授	今井 要人	昭和42年～昭和53年	助手・ 助教	田中 広行	昭和42年～昭和49年	
	山田 辰次	昭和42年～昭和56年		泉 万喜男	昭和42年～昭和55年	
	安田 与吉	昭和42年～平成3年		天野 一彦	昭和44年～昭和48年	
	鐘ヶ江 貢	昭和43年～平成2年		園田 裕虎	昭和53年～昭和55年	
	薄 慶治	昭和44年～昭和47年		香月 隆志	昭和63年～平成10年	
	大塚 謙一	昭和46年～昭和62年		諸隈 正人	平成3年～平成6年	
	小林 幸治	昭和49年～昭和51年		織田 親宏	平成6年～平成7年	
	加賀見 一二三	昭和51年～昭和57年		杉浦 高明	平成6年～平成7年	
	生島 芳雄	昭和51年～昭和62年		木村 貴之	平成6年～平成8年	
	川原 琢磨	昭和52年～昭和54年		徐 光黎	平成8年～平成10年	
	最上 幸夫	昭和53年～平成2年		畑岡 寛	平成11年～平成22年	
	長弘 雄次	昭和56年～平成7年		技師・ 技能員	高橋 秀雄	昭和50年～昭和53年
	諫山 幸男	昭和59年～平成6年			石井 一治	昭和50年～昭和62年
	田中 邦博	昭和61年～	大坪 智		昭和53年～昭和62年	
	小坪 清眞	昭和62年～平成6年	山田 良一		昭和55年～昭和56年	
	松下 博通	昭和62年～平成7年	森門 昇		昭和56年～平成3年	
	三原 徹治	昭和62年～平成19年	下打 忠重		昭和62年～平成9年	
	上田 年比古	平成元年～平成7年	木本 孝		昭和63年～平成7年	
	高山 俊一	平成元年～	安藤 忠夫		平成元年～平成15年	
	小島 治幸	平成3年～	小林 久夫		平成3年～平成18年	
	烏野 清	平成4年～	久保田 晴健		平成7年～平成8年	
	荒尾 慎司	平成6年～平成16年	森 巖		平成9年～平成16年	
	片山 正敏	平成6年～平成17年	笈木 敏行		平成10年～	
	前田 良刀	平成6年～平成21年	柴田 利夫		平成16年～	
	森山 克美	平成7年～	狩山 裕	平成17年～		
	牧角 龍憲	平成9年～	原 喜則	平成19年～平成21年		
助教授	荒巻 真二	平成10年～平成20年	事務員	熊谷 和也	平成21年～	
講師	相本 正	昭和51年～昭和53年	大隈 えり子	平成元年～平成17年		
	鄺 曙光	平成15年～				

3. 卒業人数

昭和45年度に第1期卒業生が卒業されてから平成21年度まで総計2160名が卒業された。今年度も22名が卒業見込みである。年度別の卒業人数を表-3に示す。

表-3 年度別の卒業人数

年度		工学部	卒業人数	年度		工学部	卒業人数
西暦	元号			西暦	元号		
1970年	昭和45年	1期生	31名	1991年	平成3年	22期生	66名
1971年	昭和46年	2期生	24名	1992年	平成4年	23期生	78名
1972年	昭和47年	3期生	28名	1993年	平成5年	24期生	63名
1973年	昭和48年	4期生	23名	1994年	平成6年	25期生	90名
1974年	昭和49年	5期生	35名	1995年	平成7年	26期生	87名
1975年	昭和50年	6期生	77名	1996年	平成8年	27期生	88名
1976年	昭和51年	7期生	72名	1997年	平成9年	28期生	90名
1977年	昭和52年	8期生	92名	1998年	平成10年	29期生	89名
1978年	昭和53年	9期生	85名	1999年	平成11年	30期生	87名
1979年	昭和54年	10期生	58名	2000年	平成12年	31期生	77名
1980年	昭和55年	11期生	64名	2001年	平成13年	32期生	68名
1981年	昭和56年	12期生	57名	2002年	平成14年	33期生	65名
1982年	昭和57年	13期生	38名	2003年	平成15年	34期生	67名
1983年	昭和58年	14期生	37名	2004年	平成16年	35期生	64名
1984年	昭和59年	15期生	27名	2005年	平成17年	36期生	53名
1985年	昭和60年	16期生	32名	2006年	平成18年	37期生	41名
1986年	昭和61年	17期生	29名	2007年	平成19年	38期生	36名
1987年	昭和62年	18期生	21名	2008年	平成20年	39期生	21名
1988年	昭和63年	19期生	19名	2009年	平成21年	40期生	17名
1989年	平成元年	20期生	25名	2010年	平成22年	41期生	22名
1990年	平成2年	21期生	39名				

4. 学科の年中行事

- (1) 新入生歓迎会 (焼き肉パーティ、秋刀魚パーティ)
- (2) 学外見学 (土木の工事現場、土木の構造物の見学)
- (3) 卒業研究発表会
- (4) 卒業式
- (5) 卒業祝賀会



図-1 新入生歓迎会の焼き肉パーティ



図-2 学外見学（環境に配慮した遠賀川河川敷の整備）



図-3 学科の卒業証書授与式



図-4 卒業祝賀会

環境土木工学科研究室の紹介

環境土木工学科 4年生 弘田 玄
宇野 伸志

1. はじめに

今年のCOM冊子は最終号ということもありまして、これまでは学外で取材をしてきた結果を持ち帰り、編集してパワーポイントで発表するという形でしたが、最終号では工学部のあゆみと各学科の研究室を紹介をさせていただきます。今回は、各研究室のメンバーや卒業研究内容、研究室行事等、今まであまり知られていなかったことを、詳細に紹介できたらと思います。

昨年に引き続き環境土木工学科のCOM運営委員をさせていただきます、小島研究室の研究生の者です。昨年は、取材旅行の原稿作成でしたが、今年は形式が違い戸惑うところもあり、未熟者で力不足ではありますが、全力を尽くし作成いたしましたので読んで頂けたらと思います。

それでは、各研究室から授かった研究室紹介の文章を、掲載したいと思います。文書構成の関係上読みにくいところがあると思われませんが、ご了承ください。

2. 森山研究室

1) 教員と学生の紹介

森山克美教授：鹿児島県出身。(専門分野)水質工学、水環境工学、水処理工学などの水質に関わる環境分野。学生思いのある優しい人。また、鍋奉行として、忘年会では美味しい鍋を披露。

板橋臣悟：福岡県出身。駅伝部に所属。4年で、幽霊部員となる。クラスの中での酒豪ランキングでは、暫定5位タイ。高血圧で、禁酒中。

上田 洸：熊本からきた～。高校時代は高校球児。酒豪ランキング僅差で2位。やるときはやれる男。

2) 卒業研究紹介

テーマは「窒素除去プロセス化のための既存下水処理場の機能評価」。

赤潮の原因である窒素を除去プロセス化するために既存の機能を調査し評価する。

3) その他研究室行事

忘年会などの飲み会が多く、研究室には常時お酒がある。また、他の研究室と合同コンペ。基本は鍋を中心。



3. 園田研究室

教員：園田裕虎准教授

メンバー：山福 真人 中島 達哉

中西 勇太

卒業研究紹介

中西勇太

私は、太陽光発電モジュールの最大発電量が得られる最適設置傾斜角や傾斜地の農園の生育状況調査などのために、ソーラープロというソフトを使って斜面日射の研究を行っています。内容は、地理的気候的条件の異なる斜面日射の構成を調べています。



中島達哉・山福真人

私たちは、九州共立大学における酸性雨と二酸化炭素の変動についての研究を行っています。

内容は、1996年から2009年までに九州共立大学内で測定された酸性雨と大気中の二酸化炭素濃度の測定値の解析です。

その他の研究室行事：

北九州市道路サポーター活動（校門前の植栽の花植えと整備など）

学校ビオトープでの米作り

ゼミ

バ～ベキュー～

鍋パ～ティ～

4. 高山研究室

1) 教員と学生の紹介

高山 俊一

いつも笑顔で穏やかな人です。しかし厳しい一面もあり、試料作りなども何度でもやり直しさせますが、学生一人一人のことをよく考えてくださる、心の広い温かい教授です。

桑尾 学

彼の出身は高知県です。体はとても丈夫で、一度決めたことはガンとして変えない頭の固いところがありますが、誰よりも人望のある真面目過ぎる男です。

中村 雄樹

熊本県出身で弓道部の主将です。いつも物静かで口数は少ないですが、冷静に自分がやるべきことを考え、積極的に行動しますが、遅れて来るのが玉にキズ。

古谷 貴紀

桑尾君と同じ高知県出身、彼は色んなことを考え過ぎるあまり心労が絶えません。しかしそれは、何事にも真剣に取り組んでいるという証拠です。でも体は危機一髪！

吉田 竜太

山口県出身、考え方は単純。

2) 卒業研究紹介

桑尾

ゼオライトを混合したコンクリートの諸性質。

吉田

付着骨材を使用したコンクリートの乾燥収縮ひずみの抑制。

中村 占谷

竹・樹皮短繊維を混合したマグネシウムモルタルの吹き付け材としての性能

5. 成富研究室

私たちは、水環境研究室に所属しています。メンバーは、成富勝教授、千々和技師、桑野技師、そして、研究室生の萩尾優希、小野田久美の5人です。

卒業研究のテーマは、萩尾が「学内ビオトープおよびガラス室における塩生植物とその他の生き物調査」、小野田が「自生する絶滅危惧植物の保護に関する研究」です。

主な活動としては、卒業研究のための調査として、兵庫県の干潟に行ったり、ビオトープ場で塩生植物の生育実験などを行ったりしています。



6. 牧角研究室

1) 教員と学生の紹介

牧角龍憲 教授

卒業研究では、常に面白いこと・新しいことをして、生徒を楽しませてくれる先生。就活の相談に対しては、常に親身。

北崎高之

からあげクンがトレードマーク。牧角研究室のからあげクン。

研究に対しては、ここ一番で実力を発揮。コンクリートを練る際の、材料の分量を測る技術は、得意な料理からの応用で光る物あり。

河野浩樹

卒研に対するやる気は、最初がピーク。今は下火。

撃たれ弱く、今は高山研究室から、研究室への侵入を幾度となく疑われ少しブルーに。

尻に火がつくまで、なかなか腰が上がらない。

2) 卒業研究室紹介

炭素繊維混入によるコンクリートの通電発熱実験。

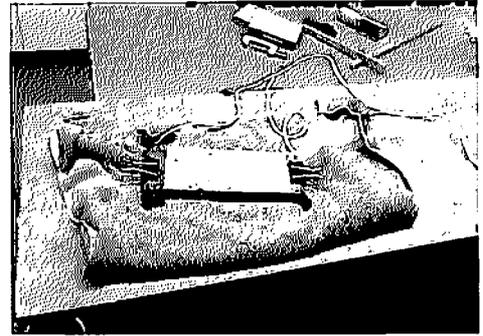
「炭素は電気を流すと発熱する」という現象を利用し、コンクリートを練り混ぜる際に、炭素繊維を混入することで、通電すると発熱するコンクリートを研究しています。

冬に北国でも凍らない道路を最終目標に、改良を重ねています。

3) 研究行事

最終目標である、冬に凍らない道路の実現に向けて、2月に北海道への研究旅行が行われます。

※写真は通電時とサーモグラフィー



7. 烏野研究室

1) 教員と学生の紹介

烏野教授…土木構造工学、弾性構造など教えている。学生への面倒見が良く学生に頼りにされている教授。時には優しく、時には厳しい。

好きなもの→芋焼酎とセブンスター。

羽田野勝登…大分出身。飲み会でいろいろ迷言(佐世保バーガーや全く似ていない物真似など)を残している。

周りから『前世は宇宙人だろ…』ってよく言われる。

住野正則…全てがナゾ。卒研に全く参加せず、卒業も危ぶまれている。

苦手なもの→苦いビール。

2) 卒業研究の紹介

烏野研究室では『軟弱粘土地盤における側方流動特性』について研究しています。計6ケースの解析モデルを作成し、側方流動の長期時間変化をまとめました。



3) その他の研究室行事

企業の方と研究したり、他の研究室と合同で飲み会したりしています！

8. 小島研究室

1) 教員と学生の紹介

小島 治幸 教授

担当科目：基礎水理学、応用水理学、沿岸環境工学、水理衛生実験、IT利用法Ⅱ、防災システム工学、卒業研究、沿岸環境工学特論、沿岸波動工学特論、水圏・環境工学特別研究
専攻(専門分野)：海岸・港湾工学、沿岸海洋・環境工学、地球環境工学

神奈川県出身。何事もめりはりのある人です。卒業研究や講義では真面目で厳しいが、食事会や飲み会では話やすくして学生となんでも話し合う仲。お酒が特に好きな方です。

鄢 曙光 講師

担当科目：水理環境実験、IT 利用法、都市計画学、土質実験

専攻(専門分野)：水理学、海岸工学、計算流体力学

中国出身。普段からやさしくて、とても話しやすい人です。パソコンを使った計算等を専門としており、パソコンのスキルは相当なものです。

熊谷 和也 技師

担当科目：実験全般、卒業研究

島根県出身。パソコンを使っての計算や数学等の理数系の科目が得意。卒業研究の調査の補助をしてもらっており、いつもお世話になっております。趣味はインターネットと読書。

卒業研究生

石田 祐士

福岡県出身。高校時代は剣道部に所属していた。二段を所有している。普段の講義や卒業研究では物静かで真面目だが、試験やテストといったここぞという時に大きな力を発揮する。プライベートや飲み会では、ものまね等のお笑いが得意で、話す面白い。

弘田 玄

高知県出身。高校時代はソフトボール部に所属。また、剣道は小学校時代から経験しており二段所有。体質的にお酒は飲めないほうだったが、総務委員会に所属していたので飲む機会が増えて多少は飲めるようになった。趣味は、バスフィッシング。

古郷 太規

福岡県出身。高校時代はレスリング部に所属しており、見ての通りの筋肉質な体型で、ルックスもワイルド系で坊主とひげが似合う男です。また、現地調査で作業服を着る機会がありますが、研究生の中ではダントツで作業服が似合う。

山野 光貴

山口県出身。高校時代はサッカー部に所属。ポジションはミッドフィルダー。学科内では一番の酒豪。彼が酔った姿を見たことがないくらい、お酒が飲める。研究室のムードメーカーであり、飲み会での彼の発言は、みんなを笑顔にする力がある。

2) 卒業研究紹介

テーマは弘田、山野が「三里松原海岸における海浜変形と沿岸漂砂に関する研究」。

三里松原海岸は、遠賀川河口から西方に芦屋海岸、新松原海岸、波津海岸と連なって波津城、黒崎鼻にいたる海岸である。三里松原海岸では 1996 年から 2002 年にかけて最大で年に約 3.6m の速度で汀線が後退する地点があり、全体的に侵食傾向である。本研究では、現地調査(海岸測量調査、底

質調査、蛍光砂調査、波浪調査)により三里松原海岸における海浜変形の実態を把握することを目的にするとともに、問題への対策方法を検討しています。

石田、古郷は「DRIM 工法における岸沖方向の長さによる特性に関する水理模型実験」。

砂浜は貴重な環境資源であり、海岸法では自律的防災機能をもつ防護施設として認知されている一方で、わが国の砂浜海岸の侵食問題は深刻化している。その対策工法として、安価・景観・環境・利用面に優れた漂砂制御技術(DRIM 工法)が提案されている。DRIM 工法とは海底にできる砂れんを SIN カーブで近似し人工的に歪ませた形状をブロック化し並べたものである。これまでの侵食対策工法にはなかった、岸沖方向の漂砂を制御することができる。この工法の漂砂制御機能の効果を水理模型実験により明らかにしている。



3) その他研究室行事

忘年会や歓迎会などの飲み会が多い。研究室での飲み会も多く、研究室には卒業生等からいただいたお酒がたくさんあります。他の研究室の学生との交流や飲み会も多い。また、月1回、小倉南区にある曾根干潟に絶滅危惧種のカブトガニの幼



生に会いに行っています。右の写真は、そのときの集合写真です。2010年10月には DRIM 工法の見学として、研究室メンバー全員で鹿児島県の指宿まで現場見学に行ってきました。

9. 田中研究室

1) 教員と学生の紹介

田中 邦博 教授

担当科目：測量工学・実験、基礎工学、土質力学、都市工学などの専門科目を教えている。何事にも熱心で、誰からも頼りにされている力量のある先生。毎日学生支援課を行き来し、多忙な時間を割いて、学生の相談を親身に聞いてくれる、人間としての鏡です。

狩山 裕 技師

口数は少なく、的確な指導をしてくれる、頼りになる技師さんです。

安田 繁 技師

向上心がつよく、頼りになる技師さんです。またバーベキューや飲み会の際には率先して幹事を務めてくれる、行動力がある方です。

卒業研究生

立橋 沙也香 やればできる人。お酒が強い人。

久保田 哲「君カワウィネ～」が口癖で、学科一の遊び人。

宇野 伸志「仕事は段取り、女は横取り」が口癖の人。



(写真) 田中研と愉快的な女子達

2) 卒業研究紹介

「高齢化社会・福祉に対応する街づくりの現状と、GIS および GPS を用いたハザードマップの作成と利用について」の研究に取り組みました。

高齢化社会を背景に捉え、土木事業に福祉的視点を用いて、バリアフリー・道路整備等を調査し、現状をより明細にした電子地図を作成することを目的としています。

3) その他研究室行事

田中研は毎日が祭り！「NO REGRETS！」を謳い文句に、何事にも取り組み、卒業式という最大の行事に邁進あるのみです。

10. おわりに

今回の COM 冊子が最終号、最後の環境土木工学科の学生、ということもありまして、去年に引き続き作成作業をさせていただきました。最初は、自ら進んでやろうと思ったことではなかったので、気分がのらず、まわりのみんなに迷惑をかけたと思います。会議も楽しい内容ではないので、早く終わらないかと、思っていたのが本心でした。でも、やらなくてはならない時期が来たら、やってやろうという自覚ができて、頑張れるようになりました。去年より、今までで一番に良いものを作ろうと、食事時間や寝る間を惜しんで、作成作業に没頭しました。

去年の取材旅行の COM 作成とはまた違い、個人のことでなく、学科全体の事を取り上げていかななくてはならなかったのが、幅が広がって大変でした。今回作成することができたのは、みなさまのご協力のお陰だと思っています。

最後に、最近の土木業界は経済的に厳しいとは思いますが、せっかく大学まで来て、土木や環境の専門知識を学ばせてもらったので、将来はその知識を生かせる場所で、頑張っていきたいと思っています。工学会の皆様には、色々協力して頂き、心から御礼申し上げます。

最後まで、ご愛読いただきまして、ありがとうございました。

建築学科の歩み

建築学科長 永田 隆昌

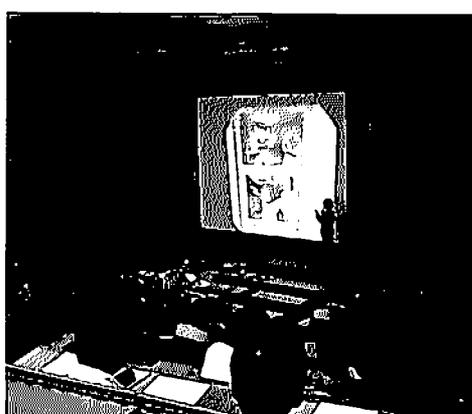
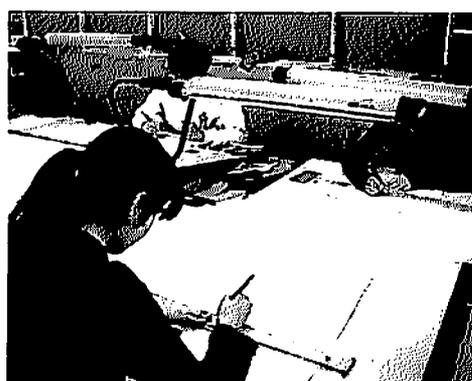
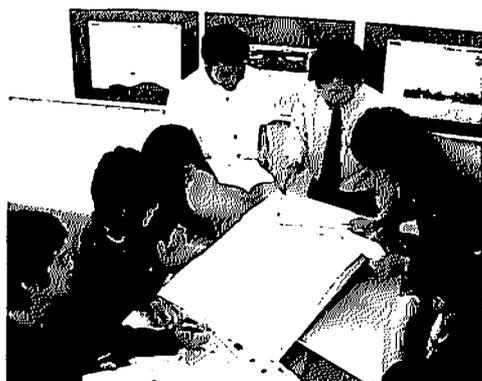
1. 学科の名称・コースの変遷

年 度	学科名	コース・課程
昭和142-昭和154	建築学科	コース分けせず
昭和155-平成2	建築学科	建築コース 設備コース
平成3-平成14	建築学科	デザインコース ビルディング・サイエンスコース
平成15-	建築学科	建築デザインコース 住環境デザインコース インテリアデザインコース

当学科は、デザイン、構造、環境工学等多岐にわたる建築学を幅広く学ぶ建築学科として昭和42年度に発足した。当初はコース区分を行っていなかったが、その後の我国経済の発展と社会のニーズに応じて建築コースと設備コースの2コースに区分された。

このコース区分は平成3年度からは、デザインコースとビルディング・サイエンスコースに名称変更し、カリキュラムもそれにふさわしいものに改めた。

さらに平成15年度の工学部の学科再編に伴い、コース区分は、建築デザインコース、住環境デザインコース、インテリアデザインコースの3コースに変更された。



2. 教員組織の変遷

	氏名	在職期間
教授	志村 正義	昭和43年—昭和51年
	岩橋 保	昭和43年—昭和50年
	角田 三郎	昭和51年—昭和53年
	木下 光夫	昭和51年—昭和54年
	松浦 正晴	昭和51年—平成元年
	根岸 耘	昭和54年—昭和61年
	重藤 和之	昭和48年—平成18年
	竹下 秀俊	昭和50年—平成17年
	加藤 孝夫	昭和61年—昭和63年
	江崎 文也	平成元年—平成16年
	堺 純一	平成16年—平成19年
	尾道 建二	昭和48年—
	永田 隆昌	昭和50年—
	古屋 浩	平成3年—
助教	西村 友一	昭和43年—昭和49年
	徳弘 貞吉	昭和48年—昭和56年
	山崎 直也	昭和50年—平成17年
	平石 久廣	昭和52年—昭和53年
	佐藤 典美	昭和53年—平成2年
	平坂 継臣	昭和51年—平成19年
	宮崎 信行	平成元年—平成22年
	大鶴 徹	平成2年—平成3年
	小島 昌一	平成17年—平成19年
	岩田 朋子	平成3年—
	堤 洋樹	平成19年—
講師	小阪 賢二	昭和48年—昭和50年
	毛井 崇博	昭和54年—昭和57年
	石内 梯三	昭和61年—平成3年

	氏名	在職期間
助教	政岡 清計	平成8年—
助手	在永 末徳	昭和43年—昭和48年
	西村 洋次郎	昭和43年—昭和48年
	大石 泰敬	昭和48年—昭和50年
技師・技能員	竹中 順次	昭和50年—昭和53年
	山野 勝	昭和48年—昭和56年
	石田 登美穂	昭和49年—昭和59年
	山田 良一	昭和49年—昭和59年
	手塚 顕太郎	昭和50年—昭和59年
	松尾 博基	昭和50年—昭和56年
	元山 肇	昭和57年—平成2年
	大庭 文夫	昭和59年—平成5年
	中島 守	昭和59年—平成7年
	栗山 哲生	平成2年—平成11年
	青木 治	平成6年—平成10年
	生野 千力	平成7年—平成12年
	花田 憲一	平成11年—平成13年
	今長谷 力	平成12年—平成18年
	高田 一俊	平成11年—
米原 義則	平成13年—	
永岡 忠光	平成15年—	
事務員	原田 真理子	平成2年—平成21年

(注) 在職期間の年号は、原則として就職年の4月から退職年の3月までを示す。

3. 年度別卒業生数

年 度	建築学科	年 度	建築学科
昭和 45	28	平成2	39
昭和 46	57	平成3	68
昭和 47	37	平成4	89
昭和 48	44	平成5	94
昭和 49	48	平成6	90
昭和 50	59	平成7	72
昭和 51	101	平成8	87
昭和 52	130	平成9	90
昭和 53	93	平成10	82
昭和 54	90	平成11	84
昭和 55	84	平成12	95
昭和 56	60	平成13	72
昭和 57	55	平成14	74
昭和 58	41	平成15	89
昭和 59	17	平成16	65
昭和 60	33	平成17	63
昭和 61	36	平成18	53
昭和 62	22	平成19	67
昭和 63	21	平成20	45
平成元	40	平成21	49
		平成22	
		平成21年度ま での累計	2,514名

4. 取得可能な主な資格

- ・一級建築士受験資格（実務2年）
- ・空調・衛生工学会設備士受験資格（実務3年）
- ・建築設備士受験資格（卒業後一定の経験が必要）
- ・教員免許
高等学校教諭一種免許状（工業）

5. 学科の年中行事

平成 19(2007)年度 建築学科業務日程概要

2007.3.28 永田

月 日	学期	全 体	対象年次				
			1 年 (担任: 堤)	2 年 (担任: 宮崎)	3 年 (担任: 尾道)	4 年 (担任: 古屋)	
4	8 前期開始	入学式(4/3)	「新入生ゼミ」計画				卒研ゼミ配属決定。
		履修申告締切(4/13) ・訂正期間(4/) 学科懇親会(総会)	出席調査日程作成 グループ履修指導 新入生歓迎行事	出席調査日程作成 グループ履修指導 ・取得済単位一覧表の作成	出席調査日程作成 グループ履修指導 ・取得済単位一覧表の作成	出席調査日程作成 グループ履修指導 ・取得済単位一覧表の作成	ゼミ履修指導(卒業単位) *卒研着手不可の学生を含む 「卒業研究要項」作成
5			Career Interview 出席調査中間報告 (5 週目, 保護者へ)	Career Interview 出席調査中間報告 (5 週目, 保護者へ)	Career Interview 出席調査中間報告 (5 週目)	Career Interview	
6			出席調査中間報告 (10 週目, 保護者へ)	出席調査中間報告 (10 週目, 保護者へ)	出席調査中間報告 (10 週目)		
7	27 後期ガイダンス 前期終了 30 定期試験(～8/5)	共立寺子屋			建築学ゼミ配属調査 建築学ゼミ配属決定		
		保護者懇談会	取得済単位数調査	取得済単位数調査	取得済単位数調査	取得済単位数調査	
9	3 再試験(～9/9) 21 後期開始	H20非常勤講師選考 卒業査定会(9/12) 履修申告	出席調査日程作成 グループ履修指導 ・取得済単位一覧表の作成	出席調査日程作成 グループ履修指導 ・取得済単位一覧表の作成	出席調査日程作成 グループ履修指導 ・取得済単位一覧表の作成	ゼミ履修指導 ・取得済単位一覧表の作成	
			出席調査中間報告 (5 週目, 保護者へ)	出席調査中間報告 (5 週目, 保護者へ)	出席調査中間報告 (5 週目)	卒業研究中間発表会 (10/ 6)	
11	2 学園祭(～11/4)	学園祭(建築展) 次年度委員 次年度予算要求 ・講義出席状況 ・定期試験	出席調査中間報告 (10 週目, 保護者へ)	出席調査中間報告 (10 週目, 保護者へ)	出席調査中間報告 (10 週目)	ゼミ履修指導 ・講義出席状況の把握	
12			出席調査中間報告 (10 週目, 保護者へ)	出席調査中間報告 (10 週目, 保護者へ)	出席調査中間報告 (10 週目)	「卒研梗概要項」作成 ゼミ履修指導	
1		学科新年会		コース所属調査	卒研ゼミ配属調査	卒研関連日程調整 卒業研究提出締切(1月) 卒研梗概要提出(製本) ゼミ履修指導(卒業単)	
2	4 後期終了 5 定期試験	建築士講座	取得済単位数調査	取得済単位数調査	取得済単位数調査	卒業研究発表会(2月)	
			成績優秀者選考	成績優秀者選考 コース所属決定	卒研着手条件判定 成績優秀者選考 卒研ゼミ配属決定	学科/学長表彰者選考	
3	5 再試験 ガイダンス	卒業査定会(3/17) 卒業式(3/25)	成績優秀者選考	成績優秀者選考 コース所属決定	卒研着手条件判定 成績優秀者選考 卒研ゼミ配属決定	学科/学長表彰者選考	

足跡をさがして～peep a little～

建築学科 4年 畑本 純志

1. はじめに～change the viewpoint～

今回の記事で COM 誌掲載の最終回ということになりました。これまで取材の眼を外側に向けて来ましたが、今回は内側に向け、私たちが普段お世話になっている教授方のお話を伺い、短いですが、おもしろく、楽しく、卒業文集に近い世界を表現できればと思います。

まずは、自己紹介です。簡単に申しますと、優秀とは程遠い人間ですが、好きなことに打ち込むと時間を忘れてしまうような輩で、数限りなく教授方に叱咤激励されたおかげで何とか卒業に漕ぎつけました。そんな私がこの記事を作成するため、直接教授方にアポイントメントを取りお話を伺いたいと言うと、案の定の顔をされました。予測はしていたものの実際に受けると案外傷つくものですね・・・。

それでは、各教授から授かったお言葉を教授ご自身の研究内容とともにここに掲載いたします。文章構成が不十分で読みにくいかもしれませんがご了承ください。

2. 永田隆昌 ー都市計画学ー

～研究内容～

現在は、南西諸島の集落・民家の伝統的空間構成に関する研究を行い、何度か研究室生と一緒に奄美大島へ調査に赴いたそうです。この研究では、文献調査や現地調査をもとに、南西諸島の集落・民家の伝統的空間構成の特徴を把握し、モデル化することを目的にしているとのこと。それが、南西諸島の集落・民家を研究する上での重要な足掛かりとなるとのことです。

・大学で印象に残っていることは？

約20年前に学生と一緒にヨーロッパ研修に行ったことがあるそうで、親切にその時の写真を拝見させていただきました。約20日間をかけて、イギリス・イタリア・ギリシャ・スペイン・フランス(順不同)を訪問した時のことを、つい先日行ってきたようにお話しさせていただきました。どの国も印象深く、写真の撮影角度、場所が大切だと教えていただきました。その他にもタイ・シンガポールや韓国(ゼミ旅行)にも訪れたそうです。また、各研究室対抗のソフトボール大会の折には商品獲得を目指して奮闘した記憶も残っているとのことでした。

3. 古屋 浩 ー空間音響学ー

～研究内容～

コンサート音場における反射音の空間特性と聴感印象の研究。人間は「音」無しでは生きていけないから、どういった環境にすれば幸福に過ごすことができるか？をテーマとする研究内容について丁寧かつ簡単にご説明いただきました。きっかけは？と尋ねると、建築も音楽も好きだったそうで、たどり着いた境地とご回答いただきました。

・大学で印象に残っていることは？

20年間、たくさんの学生に出会えたこと。さらに、卒業後に連絡を取ってくる学生もいる、と大変嬉しそうでした。

4. 岩田 朋子 —建築照明学—

～研究内容～

建築物の内部空間に、その用途にふさわしい照明環境をつくり出すための方法、その快適さを保つための方法等の研究テーマに取り組んでいます。私はこの研究室に在籍しました。卒業論文の研究テーマは、天空輝度分布の出現頻度に関する検討。CIE 標準一般天空の各天空タイプの出現頻度を求め、それについて考察しました。

・大学で印象に残っていることは？

「研究室に優秀で頭の切れる学生が配属され、研究も進み、研究室でも明るく楽しく過ごせました。学生の潜在能力を見極め、正しい方向に眼を向けさせ、しっかりと指導した賜物だと思います。建築学科唯一の女性教員の視点から、我が子の成長を見守るように学生と接してきて良かったと思います」とご回答いただきました。

5. 堤 洋樹 —建築材料学—

～研究内容～

1. 建物の平均寿命の都市別算出手法に関する研究
(平成 22 年度科研・若手研究(B)採択決定)
 2. 公共施設マネジメントシステム構築に関する研究
(平成 20 年度科研・基盤研究(C)・2010 年度まで継続)
→早稲田大学小松研究室と共同研究
 3. 「ナノ」グリッドシステム構築に関する研究
→北九州市立大学高研究室、名古屋大学谷川研究室、
早稲田大学小松研究室、北九州市、九州電力(株)と共同研究
 4. 公共サービスマネジメントに関する研究
→早稲田大学小松研究室、名古屋大学谷川研究室、
佐倉市、国際航業(株)と共同研究
 5. 鉄筋コンクリート新工法の耐久性に関する実証研究
→九州職業能力開発大学校牟礼研究室と共同研究
- ・大学で印象に残っていることは？

「私は、この大学に来て短いですが、最初は体育会系のイメージだったが、そうでもなく、またたくさんの学生が在籍していたことに驚いたことが印象に残っている。また、新入生の歓迎をするバーベキューも楽しかった」とご回答いただきました。

研究室にあったチューバ(楽器)を弾くと...

過去に吹奏楽とオーケストラをしていて、最近はお無沙汰とのことでした。魅力を聞くと、低音は主旋を支え、周りの状況を視ることができること、とご回答いただきました。

6. 政岡 清計 —建築歴史・意匠学—

～研究内容～

江戸時代の山車に関する研究です。江戸時代、山車の製作は、建築職人の仕事の範囲でもあったことを明らかにしようと思っています。また、山車のデザインの歴史的な位置付けを、民衆の存

立との関わりから捉え直すことも考えています。

大学で印象に残っていることは？

「建築やそれ以外の他愛もない話など、学生さんと語りあったことなどが思い起こされます」とご回答いただきました。

7. その他集まったお言葉～actual materials～

現代社会には、モノや情報が溢れていますが、自分にとって本当に必要なモノや情報はごくわずかです。モノや情報の洪水に流されないために、本当に価値のある物や情報を見分ける力、取捨選択する力を身につけて、激動を生き抜いて行ってください。

from 永田 隆昌

人間関係、人とのつながりを大切にし、先輩後輩関係なく意見を言える人間に！

from 古屋 浩

これから頑張ってくれるのは当然ですが、学部・学科が無くなるのは寂しいことだと思いますが、大学以外でも同期同士で集まり、また大学に愛着のある人は機会があれば訪れて欲しいです。

from 堤 洋樹

8. あとがき～walk on the beach～

今回 COM 誌が最終号ということで視点を変えて挑戦させていただきました。はじめは乗る気でないものでしたが、意外にもやる気スイッチが入り円滑に物事を運ぶことができました。ご協力頂きました教授方有難うございました。さて、今回現職の方を中心に研究室を直接訪れたのですが、「私」という人間を本当によく知っている方々なので、それはもう嫌な顔をするのなんの... こっちも見たくないやい！なんて思っていないです。しかし、これまで面と向かってお話しする機会がなかったのでそれはそれで楽しくもありました。一方で、二つ返事で協力して下さった方もおられ、とても感謝しています。実はアンケート形式で行うことも可能だったのですが、直接お話ししたかったというのが私の本心でありました。

現代社会では、機械文明が発達し人とのコミュニケーションの場は広がったものの、実際は顔を合わせて会話をする機会が無くなったと私は感じます。どんなに機械が発達しようと顔を合わせる会話に勝るコミュニケーションは無いと思います。

ですから、直接にお話しを伺った証拠品という足跡を残すため未熟者ではありますが奮闘させていた次第でございます。

では、建築学科の最後を次の言葉で締めたいと思います。

「アスファルトは簡単に歩くことは出来るが足跡が残らない。しかし、砂浜は歩みにくい足跡がはっきりと残る。どちらの道が良いのか分かりませんが、砂浜が正しい道であってほしいと思います。

少しばかり「あとがき」のほうが高くなったような気もしますが、文章を作成にあたってご協力頂いた教授方、最後までご愛読いただきました方、この場をかりて厚く御礼を申し上げます。

環境サイエンス学科の歩み

旧環境サイエンス学科 亀田 伸裕
成富 勝
園田 裕虎

1. 学科の名称・コースの変遷

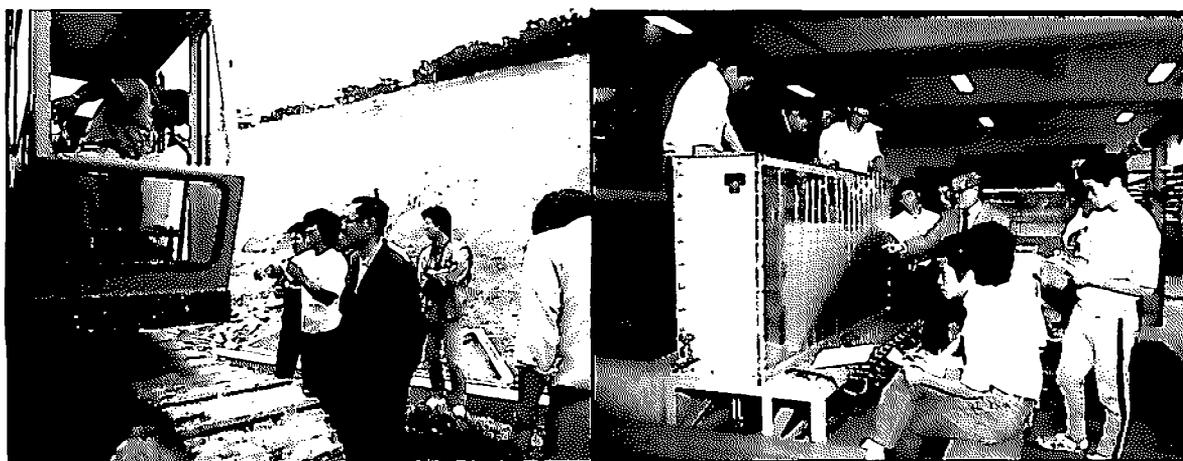
環境サイエンス学科は、昭和54年に設立された開発学科を核とした学科である。開発学科は、もともと東南アジア近隣諸国の開発途上国に対する中堅技術者を養成する目的で開設された学科であるが、その後の社会情勢の変化と地域の環境保全や、環境創造に対して工学・農学的分野から対処するため、平成13年4月に名称を地域環境システム工学科と変更した。さらに、在学生、受験生、保護者の方々から従来の学科の名称が長たらしく、内容が分かりにくいとの指摘があり、平成17年4月に簡潔明瞭で分かりやすい“環境サイエンス学科”に名称を変更した。また、地域環境コース（生態環境分野と緑地環境分野）と自然環境コース（自然環境分野と環境情報分野）の2コース制とし、学科の内容を明確にした。

表1 学科の名称とコース

年 度	学科名	コース
昭和54(1979)～平成12(2000)	開発学科	
平成13(2001)～平成16(2004)	地域環境システム工学科	
平成17(2005)～平成21(2009)	環境サイエンス学科	地域環境コース・自然環境コース

当学科は土、水、緑、自然エネルギーに関する科学と技術を幅広く学び、自然と人間が共生できる環境づくりを目指す技術者養成を目的とした。具体的課題として、健全な水循環の維持・保全、流域の水質浄化、ビオトープの保全と創出、土壌劣化・塩類化の防止、騒音・振動の回避、自然エネルギーの活用などを扱う。これによって、良好な生態系とエコ環境を創出・維持・保全し、自然環境の保全を図る。また、自然環境と調和する人間の生活・生産活動システム、すなわち地域環境システムの在り方について扱う。

さらに、国際的な視野を広げる目的で「海外研修旅行」を通して海外生活を体験できる。



2. 教員組織の変遷

表2 開発学科・地域環境システム工学科・環境サイエンス学科 教職員一覧

氏名	在職期間
教授	
川原 琢磨	(S52.4-S55.5)
菊地 和雄	(S56.4-S61.12)
松原 茂	(S57.4-H2.3)
守島 正太郎	(S54.4-H1.3)
田辺 邦美	(S55.4-H1.3)
長 智男	(S63.4-H5.7)
粟谷 陽一	(H1.4-H6.3)
片山 正敏	(H1.4-H6.3)
河原田禮次郎	(H6.4-H11.3)
渡辺 明	(H6.4-H13.3)
岸田 恭允	(H6.4-H16.3)
黒田 正治	(H11.4-H18.3)
矢野 友久	(H18.4-H21.3)
亀田 伸裕	(S63.4-H22.3)
成富 勝	(H1.4-H22.3)
今田 盛生	(H16.4-H22.3)
准教授 (助教授)	
川原 宣彦	(S53.4-H5.3)
福田 哲郎	(S55.4-H2.1)
森 信之	(H1.4-H19.3)
竹内 真一	(H6.4-H19.3)
中山 伸介	(H8.4-H21.3)
園田 裕虎	(S54.9-H22.3)
講師	
Thomas McMahon	(H5.4-H6.3)
助手	
山下 三平	(H2.4-H3.3)
荒尾 慎二	(H3.4-H6.3)
弓削 こずえ	(H13.4-H17.3)
丸居 篤	(H17.4-H18.9)

氏名	在職期間
技師 (技能員)	
石橋 喜一郎	(S54.4-S62.7)
梅本 一男	(S62.4-7)
下打 忠重	(H10.4~H14.3)
成富 義泰	(H14.4-H15.5)
元村 友次	(H9.4-H19.3)
天久 真由美	(H16.4-H19.3)
中村 勝昭	(H19.4-H20.3)
安田 繁	(H19.4-H22.3)
千々和 九州男	(H15.6-H22.3)
桑野 孝雄	(H20.4-H22.3)
教室事務補助員	
横溝 美加	(S62.11-S63.10)
馬場 いずみ	(S63.11-H1.10)
川上 由美子	(H1.11-H18.3)
平山 多美江	(H18.4-H21.3)
非常勤講師	
太田 喜久	(S57.4-S58.3)
土屋 忠征	(S57.4-S59.3)
中村 素也	(S56.4-S63.3)
脇水 健次	(S58.4-S63.11)
林 静夫	(H5.10-H6.3)
大坪 政美	(H5.4-H7.9)
渡辺 明	(H13.4-H13.7)
森 信之	(H19.4~H19.9)
中野 芳輔	(H19.4~H20.3)
薛 孝夫	(H5.4~H21.3)
仲間 浩一	(H8.4~H22.3)
出光 隆	(H13.9~H22.3)
佐々木 昭士	(H16.9~H22.3)
中山 歳喜	(H16.9~H22.3)
松末 義実	(H18.4~H22.3)
松本 雅道	(H19.9~H22.3)
集中講義講師	
竹内 謙蔵	(S57.5.8,9)
西岡 栄	(S56.7,9)
江島 一浩	(S62.2)
上野 重義	(S62.9)

3. 卒業生の数

表3 年度別の卒業生数

卒業生数一覧

年度	開発学 科	地域環境 システム 工学科	環境サイ エンス学 科
S57年度	6		
S58年度	10		
S59年度	8		
S60年度	11		
S61年度	10		
S62年度	10		
S63年度	5		
H1年度	6		
H2年度	22		
H3年度	41		
H4年度	41		
H5年度	50		
H6年度	58		
H7年度	46		

年度	開発学 科	地域環境シ ステム工学 科	環境サイエ ンス学科
H8年度	56		
H9年度	57		
H10年度	56		
H11年度	54		
H12年度	54		
H13年度	41		
H14年度	35		
H15年度	20		
H16年度	0	30	
H17年度	0	21	
H18年度	0	33	
H19年度	0	27	
H20年度	0	1	19
H21年度	0	0	21
合計	697	112	40

4. 学科の年中行事

4月：入学式、履修指導、新入生歓迎行事

6月：キャリア面談、学外研修

7、8月：国内研修旅行

8、9月：海外研修旅行、保護者懇談会

10、11月：キャリア面談、学外研修

2月：卒業研究発表会

3月：卒業式、卒業茶話会

5. その他

当学科の特色として、海外と国内における開発や環境保全の現場及び諸施設などを見学することによって、講義内容をより深く理解するとともに、英会話を実地に体験することによって国際的感覚を身につけさせることを目的して、3年次の夏休みに海外研修旅行、2年次の夏休みに国内研修を実施している。主な研修先は下記の通りである。

《海外》

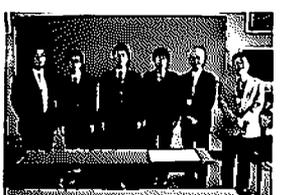
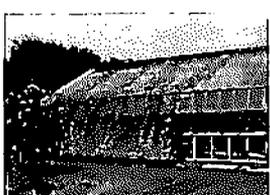
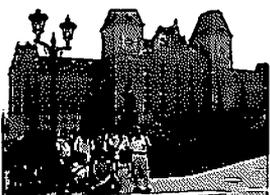
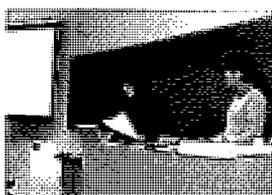
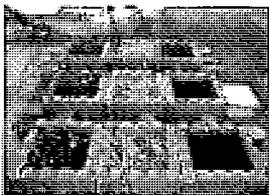
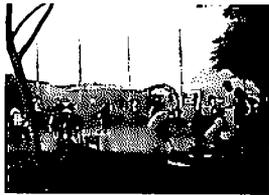
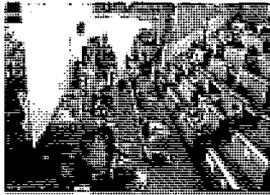
タイ、フィリピン、インドネシア、シンガポール、マレーシア、中華民国、アメリカ西海岸、フランス、オランダ、イギリス、イタリア、ギリシャ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、ハワイなど

《国内》

佐賀、福岡、長崎、熊本、大分、山口など

取得可能な主な資格

施工管理士（土木・管工事・造園など）、測量士補（実務経験1年で測量士）、ピオトープ管理士、生物分類技能検定、中学校・高等学校教諭1種免許（数学）









環境化学科と生命物質化学科の歩み

工学研究科環境システム学専攻 甲斐原 梢

「開発と発展」の20世紀から「環境と共生」の21世紀へ向かおうとする昭和54年4月、手痛い環境汚染の体験から着実に環境再生を実践する北九州の地で、工学部の中にもありながらも、生物・生態系に関する知識と柔らかな感受性をもつ人材を育てることを目的とする、全国的にもユニークな学科として共立大学工学部環境化学科は設立された。

環境化学科設立年度、昭和54年度の教員は、山本陽、遠藤敏廉、秋貞英雄、吉川博道の教授1名、助教授（准教授）1名、講師2名であった。更に、次年度の昭和55年度には、片山平、梁井光二の教授2名、坂田久子、高橋裕子、渊上貴美子の助手（助教）3名が加わった。昭和57年度に環境化学科第一回卒業生を送り出した際には、一番ヶ瀬尚、田代勇司の教授2名と森田士郎が助教授（准教授）として新任され、助教授に昇任した秋貞英雄、吉川博道、更に、渊上貴美子に加えて、新任された古賀直子、高木美智子、馬場満子、松村美紀子の助手4名の合計14名からなる教員組織により、一般的な化学関連科目に加え、生物学、微生物学、分子生物学、更に、環境関連領域の科目についての教育を受け、環境計量士や公害防止管理者の環境関連国家資格、危険物取扱者資格、更に中学校・高等学校の理科教員の資格取得を目指した6名が社会に巣立つこととなった。

それに続いて、昭和から平成に元号が変わった平成元年度までに各々、9、7、9、14、19、16、26名の学科卒業生が送り出された。その間の教員の新任、昇任は以下の通りである。昭和59年度に古賀寿子、木付晴美を助手、昭和60年に木下良子、山角志保子を助手、更に石橋喜一郎を技能員、昭和61年度に、西尾恵里子を助手、福原秀雄を技能員に新任。昭和62年度には、森田士郎が教授昇任、藤（長）普子と日高秀夫を講師新任、萩尾真由美と宮崎菖子を助手新任。昭和63年度には、秋貞秀雄、吉川博道が教授昇任、藤普子、日高秀夫が助教授昇任、吉満斎を講師新任、更に、平成元年度には、生田みどり、山崎（竹内）澄代が助手新任となった。

平成2年度から平成13年度に至る11年間は、当時の時代的な背景もあり、各々、40、48、45、50、86、78、81、82、84、88、86、71名と比較的多くの学科卒業生を8研究室から送り出すことが出来た期間である。教員体制は、平成2年度当初、秋貞英雄、田代勇司、森田士郎、山本陽、吉川博道、藤普子、日高秀夫、吉満斎、生田みどり、木下良子、土井恵子、西尾恵里子、山崎澄代、茅田美華子の教授5名、助教授2名、講師1名、助手5名、技能員1名で構成されていたが、新任、昇任、退職等の教員異動も頻繁であった。以下、新任、昇任による教員異動についてのみ記す。平成3年度に宇都宮裕子、大久保（篠田）美智代、正木（西田）真紀子、平成4年度に大江（武井）紀子、及び平成6年度に木山貴子、米村和恵を助手に新任。平成8年度には、長普子、日高秀夫が教授昇任、更に、島田淳巳を講師、西田（栞原）順子を助手に新任。平成9年度に吉満斎助教授昇任。平成11年度には、松口龍彦を教授新任、島田淳巳を助教授昇任、山平寿智を講師新任、市木弥生、井手口佳子、外菌亜紀子を助手に新任との経過を辿った。

学部学生に対する教育研究活動に加えて、教員の一部は、平成13年4月の共立大学大学院工学研究科設置に伴い、大学院博士前期課程で環境システム学専攻環境ライフサイエンス系の教育研究を担当することとなった。更に、平成14年12月には、大学院工学研究科博士後期課程の設置が認可され、環境・都市システム学専攻の環境創造システム領域での教育研究についても担当するこ

ととなった。

一方で学部教育に関しては、他大学でも同様の傾向が見られていたが、平成14年度から平成19年度には、61、47、33、36、26、34と推移する学科卒業生数にも現れている様に、工学部の学生数減少傾向が顕著になり始め、学生募集等、対策に苦慮した時期でもある。教員組織についても、退職者の後任採用人事の滞りが目立ち始め、特に教授、助教授、或は、講師により主宰される8研究室全てでの助手任用は困難な事態となった。平成14年度当初は、秋貞英雄、長普子、富田純史、松口龍彦、森田士郎、吉川博道、吉満斉、島田淳巳、井手口佳子、市木弥生、竹内澄代、西尾恵里子、西田順子、西田真紀子、外岡亜紀子の教授6名、助教授2名、助手7名の構成であったが、平成16年度に添田孝彦、古賀克己、甲斐原梢の教授新任、平成17年度に田中雄二の講師新任と西田真紀子の講師昇任、平成18年度に竹中裕行、林葉康彦の准教授新任、更に平成19年度の柴原順子、西尾恵里子の講師昇任を経て、環境化学科としての最終年度となった平成19年度には、秋貞英雄、甲斐原梢、古賀克己、富田純史、竹中裕行、林葉康彦、柴原順子、田中雄二、西尾恵里子の教授4名、准教授2名、講師3名の構成での教育研究体制となった。

工学部の受験希望者、入学希望者数の改善を図ることを目的として、工学部各学科の内容が見直されたことで、平成17年4月より、環境化学科は生命物質化学科として改組され、従来との環境関連の化学、生物領域の教育研究に加え、食品衛生領域の教育・研究を行う学科として再出発を行った。環境化学系コースと食品化学系コースのカリキュラム設定により、従来との環境化学科で取得可能であった環境計量士、公害防止管理者、危険物取扱者に加えて、食品衛生管理者、食品衛生監視員、食品衛生責任者の国家資格取得が可能となり、従来より取得可能であった中学校・高等学校の理科教員資格と共に、卒業生の就職等に更に有利な条件が整えられた。

しかし、発足したばかりの生命物質化学科は、理由の詳細は不明のままに募集停止の決定がなされる事態に立ち至り、平成20年度に20名の最初の卒業生を、最後の環境化学科卒業生3名と共に、秋貞英雄、甲斐原梢、古賀克己、林葉康彦、田中雄二、西尾恵里子の6名の教員により送り出し、学科としての最終年度となった平成21年度には、秋貞英雄、甲斐原梢、林葉康彦、准教授に昇任した田中雄二、西尾恵里子の5名により15名の卒業生を送り出した2年間だけの存続に止まり、31年間の環境化学科とそれに続く生命物質化学科としての使命を終えることとなった。結果として、送り出した環境化学科卒業生の総数は1185名、生命物質化学科卒業生は、残念ながら35名に止まった。続いて工学部としての最終年度を迎えた平成22年度には、大学院工学研究科へ甲斐原梢、同じ福原学園内の九州女子大栄養学科教授へ林葉康彦、共立大学各学部の一般教養科目や新たに導入されたキャリアデザイン科目を担当する教育組織である共通教育センターへ田中雄二と西尾恵里子が異動し、各々、新たな所属先で教育研究に当たると共に、生命物質化学科や大学院工学研究科環境システム学専攻や環境・都市システム学専攻閉鎖に伴う残務整理を行った。

「工学部お別れ会」の報告

「工学部別れ会」が、平成23年2月19日に九州共立大学自由ヶ丘会館にて開催された。この会は、工学部卒業生と旧教職員に対して、工学部の状況を説明することを第一の目的として行われ、年度末の忙しい時期にもかかわらず卒業生161名、旧教職員25名、現職教職員80名（工学部43名、他学部37名）、学生約45名、計約310名が参加した。

「工学部お別れ会」は、環境土木工学科の牧角教授が総合司会を務められ、下記に示される式次第に沿って行われた。まず、福原学長の挨拶で始められ（写真-1参照）、続いて小島工学部長より本会の趣旨説明が行われた（写真-2参照）。趣旨説明では、平成20年4月に全学科の学生募集を停止した段階で、在学生には説明会を開催し、保護者には後援会の総会や本学や各地の保護者懇談会で説明し、卒業生に対しても同窓会の総会や各支部での総会で説明してきたが、同窓会の総会や支部総会に来られた方は残念ながら1万有余の卒業生のほんの一部の方であることから、大学として、可能な限り多くの卒業生の方にきちんと工学部の状況を説明する必要性が強く認識されたとの説明があった。それから、工学部の教員や学長との協議が行われ、工学部の状況を文書で知らせるとともに、会を設けてそこで説明をすることが決定された。これを受けて、同窓会「自由ヶ丘」に協力の依頼をしたところ、「全面的に協力させていただきます」との暖かいお言葉を頂き、同窓会の名簿を使わせて頂き卒業生に連絡することが可能となった。さらに、在学生に対しては、学生と教員の代表が入った工学会という組織体で検討され、「寂しく後ろ向きな会であれば、そんな会はしない方がよい」や「何か建設的な会であれば参加したい」という意見が出された。いろいろと議論を重ねて、工学部の卒業生の先輩で社会において活躍されている方に講演をして頂こうとの意見でまとまった。

「工学部お別れ会」式次第

日時：平成23年2月19日（土）15：00～19：30

場所：九州共立大学自由ヶ丘会館4階多目的ホール（講演会と説明会）

九州共立大学自由ヶ丘会館1階食堂（懇親会）

1. 挨拶と趣旨説明
2. 工学会講演会

演題：「環境と建設技術の融合で挑戦し続ける

～夢を持ち継続することの大切さ～

講師：原 裕 氏

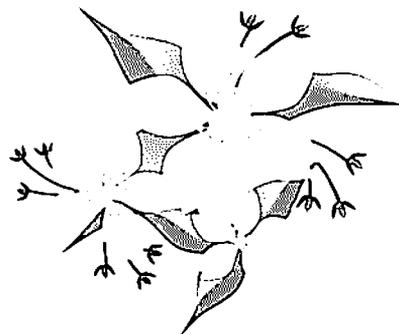
博士（工学）（佐賀大学）

日本建設技術株式会社 代表取締役社長

九州共立大学工学部土木工学科 2回生

昭和47年3月31日 卒業

3. 休憩
4. 工学部の歩みと廃部に関する説明と質疑応答
5. 休憩と移動
6. 懇親会
 - 開会挨拶
 - 献杯
 - 来賓挨拶
 - 自由談笑
7. 閉会の挨拶



同窓会に講師を推薦して頂き、土木工学科2回生で、建設関係の会社の代表取締役社長を務めておられる原裕氏に、「工学会講演会」の講師をお願いした。このような経緯で「工学部お別れ会」が開催されることが説明された。原裕氏による「工学会講演会」が「環境と建設技術の融合で挑戦し続ける一歩を持ち続けることの大切さ」と題して行われた（写真-3参照）。これに関しては、本誌の「平成22年度工学会講演会について」を参照されたい。

小島工学部長より工学部の歩んできた道を振り返りながら、工学部学生募集停止に至る経緯とその後の方針などについて説明があった（写真-4参照）。昭和42年に4学科で開設された工学部の歩みに関して、前半の20年間に於いて第2学舎から第8学舎までの竣工による施設の充実や昭和48年度からの入学定員の増員、昭和54年4月に環境化学科と開発学科の増設など、工学部の発展の歩みがパワーポイントの資料（図-1参照）を用いて説明された。昭和62年度以降の第2次ベビーブーム世代が高校を卒業するのに伴う学生数の増大と工学部を基礎とした大学院工学研究科の開設、三大学統合構想などの工学部がもっとも輝いていた時期の紹介があった。三大学統合構想の中止後、工学部では急激に進む少子化や若者の理工系離れなどの危機意識が高まり、三大学統合案で作りに上げた学科改組等の改革を推進すべきとの意見でまとめ、平成17年度に2学科の改組と3学科の名称変更を行った。しかし、平成14年度以降から継続的に入学定員未充足が続き、平成19年4月に環境サイエンス学科（開発学科）と生命物質化学科（環境化学科）が学生募集を停止した。残る4学科を前提とした工学部組織改革と工学部の教育体制を充実させるための方策が検討され、1学部1学科の環境工学部環境工学科（仮称）が平成18年12月に大学改革検討委員会に提示された。だが、この案では定員確保が確実なものではないと理事会で判断され、平成19年5月29日の理事会で工学部すべての学科の学生募集を平成20年度より停止することが決定された。学生募集停止後の工学部の動向が最後に説明され、質疑応答が行われた。



写真-1 福原学長の挨拶



写真-2 小島工学部長の趣旨説明

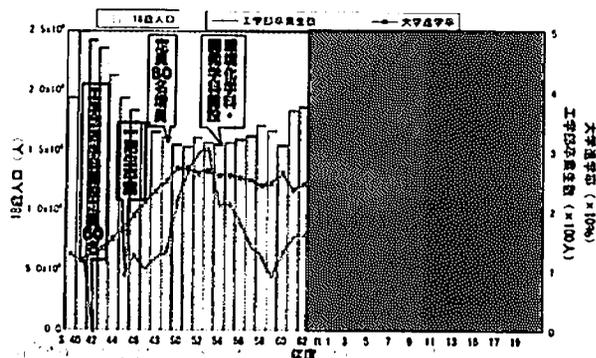


写真-3 原裕氏の講演



写真-4 小島工学部長による説明

工学部開設から20年間



九州共立大学大学院工学研究科の開設

広くなる設置申請の区域を余念なくされた大学院工学研究科博士課程の設置について、学園創設者の遺言でもあったこと、本学がハイテク産業都市を目指す北九州市に位置していること、市内内に工学研究科を持つ大学が一つのみであること、国際化に対応して留学生の大学院進学を可能にすることを工学研究科の設置理由として、平成12年7月に設置認可を得た。9月末の現地調査を経て、12月21日付けで設置認可を得て、大学院工学研究科は平成13年4月に開設した。

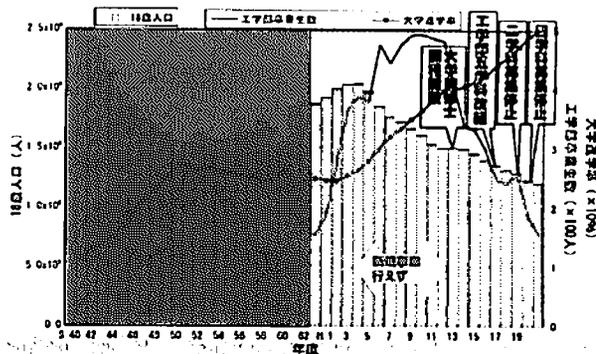
専攻名	設置趣意
機械制御システム工学専攻 (入学定員8名)	材料加工、エネルギー管理、制御システムおよびシステム工学の推進により構成する。
電子制御工学専攻 (入学定員6名)	電子物性、計測・制御システム、電気システムおよび情報処理システムの推進により構成する。
都市システム工学専攻 (入学定員7名)	環境システム工学、都市計画工学、都市・環境工学・水質・環境工学および都市システム工学の推進により構成する。
環境システム工学専攻 (入学定員6名)	地球環境工学、環境工学、環境化学および環境生命化学の推進により構成する。

工学部の学科改組および学科の名称変更 : H.17年

三大学統合の中止により大幅な学部各科の編成や内容の変更による教育改革が進められなくなるとの危機感を持った工学部は、今後急激に進む少子化による18歳人口の減少や若年層の理工系離れの増加に対して、早急な教育改革が必要であると強く意識した。このため、三大学統合案で作り上げた学科改組等の改革を推進すべきとの意見がまとまった。この教育改革の基本的な考え方は、「従来、工学分野はそれぞれが独立した専門領域からなる学科構成としていたが、21世紀における技術社会では融合型テクノロジーへの発展が加速しており、複合的領域に精通した技術者が要請されている」とことである。

- ・ 旧工学部の学生募集を停止し、電気電子制御工学部の電気電子分野を統合させた「メカエレクトロニクス学科(入学定員66名)」を新設設置
- ・ ハード全体の電気電子制御学科を募集停止し、文系的課程を取り入れた「国際学科(入学定員66名)」を新設設置
- ・ 土木工学科は、都市の整備および再開発事業が盛んになり、都市の発展を守り、維持するためのシステムの構築が要請されているため、「都市システム学科(入学定員66名)」に名称変更
- ・ 地球環境システム工学科は、その名称では学科の内容が分かりにくいので、「環境サイエンス学科(入学定員60名)」に名称変更
- ・ 環境化学科は、近年、食品を含む物質の安全性や健康性に社会の関心が高まってきたことから、食品関連の教育内容を充実させるため、「生命物質化学科(入学定員60名)」に名称変更

工学部開設後21年~42年



工学部組織改革と工学部の教育体制

- ・ 平成17年度に2学科改組および3学科の名称変更を行ったが、6学科すべて定員割れに陥った。スポーツ学部の設置認可に関しては、「工学部メカエレクトロニクス学科、情報学科、都市システム工学科、環境サイエンス学科、生命物質化学科の入学定員比の平均が0.7倍未満となっていることから、今後の定員充足のあり方について検討すること」との留意事項が付けられた。
- ・ 平成17年12月21日開催された健康学園大学改革検討委員会にて、その委員会のもと九州共立大学工学部改革検討小委員会(委員長:大学改革プランナー員田嶋博助教授)の設置が承認され、工学部改革について検討を重ねた。その結果、名称変更を行っても入学者の減少が止まらず、今後の見通しも立たない環境サイエンス学科と生命物質化学科の2学科を平成19年度から募集を停止することを平成18年7月に決定した。
- ・ 残る4学科を前提とした工学部組織改革と工学部の教育体制を充実させるための方策を検討するために工学部ビジョン委員会が平成18年6月30日に設置された。この委員会は、積極的に作業を進め、短期間で改革案をまとめ上げた。その案を基に、その当時の学長から6学長推薦として、1学部1学科の環境工学部環境工学科(仮称)が平成18年12月に大学改革検討委員会に提示された。

工学部の学生募集停止

平成19年5月29日の理事会で決定

本学工学部は、創設以来40年の長きに亘り教育・研究に邁進し、多数の優秀な人材育成に努めてきた。しかし、近年の18歳人口の減少、理工系離れという社会的環境の変化の中で平成10年度以降には入学希望者の減少が加速し、平成14年度からは入学定員未充足の状況が続いた。

このため、学科名称の変更、学科の改組転換、環境サイエンス学科および生命物質化学科の学生募集停止と組織改革、教育改革を実施してきたが、入学定員の充足率の減少に歯止めをかけることができず、このたび工学部4学科の学生募集の停止を決定した。

年度	定員充足率 (%)
10	118.3
11	98.0
12	92.4
13	103.8
14	69.8
15	76.4
16	78.7
17	59.6
18	40.0
19	41.2

募集停止以降

- ・ 学生募集の停止以降、大学改革検討委員会のもとに「工学部検討小委員会」が設置され、理工学系統の新たな教育組織構築の検討がなされた。
- ・ 北部九州の産業に対応した自動車産業を中心とする学部、生産現場におけるリーダーとなり得る工学マネジメント関係学部、医療現場において必要とされる医療工学関係学部などの可能性に関して検討が行われた。
- ・ しかし、新学部の案を作成するまでには至らず、また組織的に成り立つような工学系の学部を設置することは現時点では難しいとの判断がなされ、新たな理工学系学部の開設も断念した。
- ・ 現在、87名の4年生が在籍し、勉学と卒業研究に励み、卒業を目指している。在学生が全員卒業した時点で工学部は廃部の準備になる。在学生87名全員が無事卒業すると、工学部卒業生は10,729名となる。

未来に向けて

- ・ 継続的な大学との関わりと支援
- ・ 活発な同窓会活動による卒業生のネットワーク作り
- ・ 理工学系学部の再生
 - ✓ 物づくり・環境都市の北九州市に立地
 - ✓ 科学技術立国を目指す日本
 - ✓ 地球環境問題を解決する重要な要素は科学技術の発展
 - ✓ 理工学系学部の志願者率は周期的変動



卒業生の力=同窓会組織の強化

図-1 工学部の歩みと廃部に関するパワーポイント・スライドの抜粋

本会の第二の目的である卒業生と在学生、現旧教職員との懇親を深めるための懇親会が、1階食堂で工学部長と学長の挨拶および同窓会「自由が丘」会長執行様の献杯をもって始められた。学科ごとのテーブルに先輩、同輩、後輩、現旧教職員が集い、大学時代の話や仕事の話などに花が咲いた。最後に、生地上学研究科長による閉会の挨拶が行われ、別れを惜しみながら「工学部お別れ会」が閉幕した。



写真-5 懇親会での献杯や歓談、閉会の挨拶などの写真

平成22年度工学会講演会について

工学会運営委員会委員長 森元史朗

1. はじめに

今年の工学会の講演会は九州共立大学工学部の卒業生である原裕氏に「環境と建設技術の融合で挑戦し続ける」という標題で講演していただいた。まずは、この場をお借りして、講師の原氏とご出席していただいた方々、さらには裏方として講演会を手伝っていただいた方々に感謝の意を記す。

2. 講演内容および感想

原氏の講演の内容は次のとおりである。

- (1) 私の経歴
- (2) 会社概要
- (3) ミラクルソル工法開発の
背景・目的
- (4) 水と土と緑の自然環境を
創出するミラクルソル工法
- (5) 産学官・産学研究開発事業
- (6) ミラクルソル工法で海外進出
- (7) ガイアの夜明け
- (8) ミラクルキャッチャー・
ミラクルアロマ
- (9) 建設業での生き残りのために
- (10) ポイント
- (11) 技術者としての夢や心構え



写真－1 講演会の様子

原氏は、工学部土木工学科を卒業された後、日本建設技術株式会社に入社され（現在、同社の代表取締役）、建築廃材の再資源化を新たな事業として立ち上げるなど、建築、環境、水産業などの事業で九州を拠点に世界的に活躍しておられ、今回の講演ではそれらの事業の紹介をしていただいた。このように社会に大きく貢献された方が卒業生におられることを誇りに思った。特に、原氏の開発されたミラクルソルにかかわる多くの技術について詳しく説明していただいた。ここで、ミラクルソルとは容器包装廃棄物である空きビンをはじめとするガラス廃材を再利用・再資源化した地球環境にやさしい新リサイクル製品であり、建設分野等の様々な分野で有効利用が可能である。

また、原氏の建設業界での経験を通して、今日の不況の中で企業として生き残るための教訓をご説明していただいた。そのためには、マーケットを意識した研究体制と人的資源を大切にすること、「夢の共有」という形で社員が一丸となること、夢を持ち挑戦し、継続することの重要性を説かれ、本学の教職員としても非常に参考になる内容であった。

情報学科 4年 高橋敬和

九州共立大学の工学部土木工学科を昭和47年に卒業された方の講演をお聞きしました。本学の卒業生にも社会でご活躍されている方がおられることを実感でき、自らの励みとなりました。最後の講演内容である「技術者としての心構え」についても、大いに共感することができ、夢を持ち挑戦し続けることの大切さを改めて認識させられました。

「工学部お別れ会」を終えて

建築学科 4年 畑本純志

今回、工学部を廃止することになり誠に残念に思います。また、工学部の存続に尽力を尽くしてくださった方々に心から感謝致します。

私は、学生生活をこの九州共立大学の工学部で青春を謳歌させて頂きました。その恩返しとはいきませんが、このお別れ会を催すことで少しでもお役に立てないかと思い運営委員会に参加しました。

最初の会議に、「工学部が廃止されるから送別会を行いましょう」と声上がり、そこに出席していた学生が、「廃止前提の会を行うのはお断りします」と険悪な空気からはじまりました。確かに学生が言われたことも同じ立場として理解できます。この4年間を工学部生として生活していたのですからその証が無くなることに不満を抱くのも納得がいきます。しかし、「仕方がない」と思う自分がそこに居ました。学生の人数は年々減っていき、追い打ちをかけるかのような少子化に不安定な経済社会。どの大学でも人数を確保するのに躍起になっていることが目にみてもわかります。そこで工学部廃止の決断は悩ましいものだったことと思います。

さて、学校というものは学生にとってはどういったものなのでしょう。学業に勤む場所、スポーツに励む場所、多くの友人に出会う場所、恋を成就させる場所、未来を見据える場所、と様々な思いがあると思います。九州共立大学には立派な敷地を構えて、そこに沢山の部屋(学舎)が存在し、その中に学部と学科という部屋があります。そこに人が集まり活気の溢れる素晴らしい人材育成ができるのではないかと私は思います。

最後に、工学部という古き良き風がやむことになりましたがご多忙中の卒業生方と一緒に「工学部お別れ会」を催すことができ大変嬉しく、ここに紙面上ではありますが感謝の意を表させていただきます。

講演を行って下さった、原 裕様に厚く御礼を申し上げるとともに、これからの九州共立大学の発展を願って工学部の卒業を祝させていただきます。

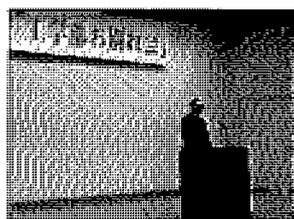


写真-1 工学部お別れ会の様子

工学会運営委員を経験して

メカエレクトロニクス学科 4年 服鳥 洋

工学会は最初めんどくさいな、大変そうだなと思っていましたが、皆で話し合い、協力しあえて楽しかったです。このような機会は学生時代になかなか経験できるものではないのでよい経験ができて良かったです。

メカエレクトロニクス学科 4年 合田明徳

私は、大学3年のときから工学会委員としてCOMの作成などに携わってきました。その中で、やりがいのある仕事だと感じていました。

特に今年度に関しては、工学部が最後ということでお別れ会やCOM最終号、COMのCD作成など皆の記憶に残るものは何かといろいろと試行錯誤しました。その結果良いものができたのではないかと考えています。貴重な経験を本当にありがとうございました。

今後共立大学に工学部が戻ってくる事を祈っています。

メカエレクトロニクス学科 4年 廣永貴美

大学生活の中で工学会の存在は当初、重要なものではないと私自身思っていました。ですが、実際に工学会委員となり自分の学部に関わる仕事をするにつれて大きな責任があることを肌で感じました。工学部の発展に少しでも貢献できたことをとても感謝しています。

情報学科 4年 高橋敬和

運営委員として、さまざまな立場の多くの方々にお会いして、人脈を広げることができただけでなく、立場の違いにより色々な考え方があることを改めて実感できました。委員会は解散となりますが、この皆様の今後の活躍を期待しています。

環境土木工学科 4年 宇野伸志

運営委員として、「工学部お別れ会」の会議・企画に携われたことは、私にとって貴重な体験となりました。この経験を活かし今後邁進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

環境土木工学科 4年 弘田 玄

私が工学会運営委員として、COMの作成等に携わるようになったきっかけとしては、3年次に取材旅行に行かないかと学科の先生に誘われたのが始まりでした。当初は、乗り気ではなく、正直委員会でボランティア活動もしていたので、面倒な事には関わりたくないというのが本音でした。しかし、今になって思うと、COMの作成や工学会委員を通して、知識も増え、人との関わりも多く、自分にとってはプラスになったと感じております。

最後に、工学会でお世話になった先生方や工学会に誘っていただいた先生には、心より感謝しております。工学部が廃止になるのは、残念ですが、私は、これからも九州共立大学の工学部関係の皆様と交流をもっていけたらと思っております。

COM STAFF

学生委員

メカエレクトロニクス学科

服鳥洋(4) 合田明德(4) 廣永貴美(4)

情報学科

高橋敬和(4)

環境土木工学科

弘田玄(4) 宇野伸志(4)

建築学科

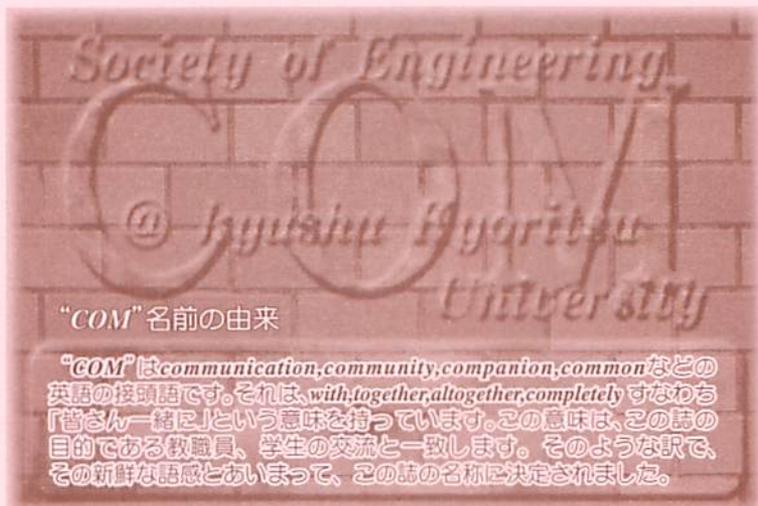
畑本純志(4)

()は学年

運営委員

共通教育センター 太田成俊
メカエレクトロニクス学科 宮入嘉夫
情報学科 森元史朗(運営委員長)
環境土木工学科 鄺曙光
建築学科 岩田朋子
教務課 森下かおり

平成23年3月19日発行



発行元 九州共立大学 工学会
〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘1番8号